
とある魔法の漂流者《キャストウェイ》

池上

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔法の漂流者^{キャスタウェイ}

【Nコード】

N2397P

【作者名】

池上

【あらすじ】

旗建設士&自称不幸人間上条当麻は本当に苦勞の多い人間である。現に、今も上空数百mからのパラシュート無しスカイダイビングを体感している最中で……

未来のタヌキ部隊長現車椅子少女八神はやてはよく出来た少女だといえる。現に、身元不明の少年を引き取る為にアレコレ手を回していたりして……

未来の教導官及び管理局の白い悪魔高町なのはとても優しい少女である。現に、傷ついて道端に倒れていたフェレットから異世界

から来た魔法使いまで様々なものに手を差し伸べてきて……

見た目女の子でジジ臭い魔術師は汚い人間である。現に、現在進行形でとある少女の為にあらゆる策略を張り巡らせていて……
科学と魔術と魔法が交差する時、物語は始まる。

池上が性懲りも無くまた投稿しました。更新がとても遅くなります
が頑張つていきます

……あらすじに違和感……

7 / 1 2 ただいま修正中

プロローグ（前書き）

キャラクターがおかしいと思えます指摘があったらお願いします

プロローグ

時刻は夜の10時を越え、人通りの少ない住宅街を静寂が支配している。

ここ海鳴市中丘町の夜空は雲一つなく、今夜は綺麗な星を見ることが出来るだろう。

八神はやてはその夜空の下で本を読んでいた。彼女の読む本のタイトルは『ケルトの神話集』だ。

しばらくすると、読み終えたらしく本を閉じ、夜空を眺めた。車椅子にも垂れながら。

「はあ」

息を漏らしたのは、別に目の前の光景に感動したわけではない。と、キラツと視界に一条の線を捕らえた。

「流れ星や！」

見た直後に願い事をかけるはやて。彼女も夢見る子供だから。車輪を転がし、部屋へ戻る。が、今日はそれだけで終わりそうもなかった。

家内の奥の方からドコウっ！バキバキバキィー！！という私生活では出ないであろうありえない音がしたからだ。

学園都市

黒髪でツンツン頭の青年、上条当麻はうなだれていた。

理由はいつものように登校途中で不良に絡まれてる女の子を見つけ、不良達に声をかけたところ偶然近くを通っていた不良仲間が出現。

そのまま鬼：逃手〓20：1の割合の鬼ごっこを勃発し振り切ったのは2時間近く経ってからだった。

さらにいつものように遅刻で涙脆い月詠小萌が上条の度重なる遅刻（不幸）でとうとう大泣き。土御門元春、青髪ピアスらを中心にクラス全員が上条をボコボコにし、少し出ていた吹寄制理が上条の暴行を目撃。己の拳を使った肉体言語で沈静させる（上条込み）。
昼食は何とか死守し、マンネリ午後を過ごし帰りつくところだ。

「……うだぁーふこーだー」

そしてたつた今、今朝の不良に見つかり30分の第二回鬼ごっこ（とうそうげき）を終え財布が見つからない事に気づいた。

うちに居座る腹ペコシスターの腹をどう紛らわすか考え付かなければ、体中に齒型がつくのは確実だ。今日も不幸だった。

「今日は特売日……、おつ。あそこ安いな」

携帯の検索機能をフル活用し、割り当てた店に向かおうと歩を進めた。ポケットマネーはかなり少ないが何とか一日は持つだろうし、ここの警察に頼めば半日ほどで戻ってくる。

「……………」
目線を下げると何故か空き缶がちょうど良く……………
捨てられていた……………。

途切れかけた思考を呼び覚まし、頭を回転させ理解する。

（…………絶対ありえねえだろこれ！？ここから不幸になるフラグですか！？いやっ！これから起こる不幸から回避すれば上条さんに地球上全ての幸運が集まってくるはず！！）

思考をポジティブに変換し、空き缶（目の前の敵）を見据える。

まずは状況を把握。空き缶のある場所は二又に分かれた道路、寮へ行く道には突貫工事が行われていて通れる幅が狭くなっている。も

う一方も帰れるように出来ているがその道のりは遠く、2倍ほどかかってしまう。

(通常に考えれば遠い方を選ぶだろうが、上条さんの場合裏目の裏目の裏目に出るからなあ。あ、やべ。ちょっと泣けてきた)

そして、上条当麻が立てた作戦は、

「……よしつ。どっち行ってもバッドエンドしか思いつかないけど、そらこ即効で安全なルートを突っ切るぼあ！」

抱負を宣言するように口に出した言葉は風になって消える。

スケボーに乗ったガキに轆かれ飛ばされ、踏み込んだ足の真下に空き缶が。

「ふあっ!?!」

そして、吸い込まれるように突貫工事で開けた穴に落ちる。その時のガキの顔はとても満面の笑み(イイ顔)だった。

「ふ、ふこっ!?!」

もちろんこれだけでは終わ(……………らないのが……………

……)上条当麻である(……………)。その穴に落ちた瞬間、

工事の穴に裂け目が出来た。

何もできる間もなく入ってしまう。錐揉みに落ちていく中、自分が入った穴を眺める事ができた。

やはり、スケボーのガキははとも満面の笑み(イイ笑顔)だった。

「不幸だあああああああああああああああああああああああ
!?!?!?!?!」

裂け目を延々と落ちていく上条は考えた。

あの裂け目に自分の幻想殺し（イマジンプレイカー）が通じなかった。異能の力ならば神の奇跡だろうが問答無用に打ち消す右手。アレがもし異能の力だったら消えるはずだ。しかし、今の状況をどう説明すれば良いのだろうか。

「あのクソガキ……次あつたら叩きのめす……！」

キャンバスに適当な絵の具をぶちまけた感じの虹色な空間の果てに終わりが見える。やっとか……と胸を撫で下ろす上条はポーンと虹色な空間から弾き飛ばされて気付く。

上空数百メートルに放り出されていた。

（あ、あははは。死んだな俺。いくら上条さんでも人生でこんな
の無いつて）

因みにこれから先にまた高い所から落ちるという体験をしてしまうことを彼は知らない。少ししてバキンとガラスが碎かれる音がした。

三百、二百、百メートル

（あゝインデックスの奴の飯誰が賄うんだ？ ステイルや神裂が何とかしてくれるか）

人生最後だというのに随分と悠長に考えるものだと感じながら落下していく。

そして、

金色の髪を持つ子供はピリツとした衝撃を感じ取った。

そして、精神的にも衝撃を受けた。

海鳴市全体に張った感知タイプのルーン術式が何らかによって壊された。術式の綻びはシャボン玉が潰れるようにどんとんと広がっていく。

悠長に猫と戯れている場合じゃない。あわててルーンを発動するが、彼の腕では間に合わない。

術式が壊された。

半年と数日の苦労が水の泡。

「……魔導士じゃ気付かれるはずがないし、あの人たちじゃ破壊できない。……魔術師、か？」

とにかく落ち着くために自問自答し、冷静さを取り戻した。

「ふ、ふふっ」

そして、不適に笑みを零した。傍にいた猫はけだるそうにみゃーと一鳴きする。

「生まれてこの方こんなにもイラだった事は無かつたはず。苦労したからなあ、あの術式。人の苦労を踏みにする者がこの街に入ってきたのならば、その虚しさや無常さを知るのは道理だろう？ 原因は君なのだから」

誰に言うわけでもなく、独り言を言い続ける恨み節魔術師。

上条当麻は何処に行っても敵を作る運命らしい。

まず目に入ったのは白い天井だった。ああ、また病院（振り出し）

に戻ったかと落胆し体を起こす。

見慣れない病室。それが昨日の出来事（不幸）が現実だとわかった途端に骨が抜けたようにベッドに崩れ落ちた。

「あの〜、大丈夫ですか？」

独特なイントネーションの声で正気に戻った上条は顔を上げた。と、鼻がくっ付きそうなほど近くに短い茶髪の少女の顔があった。

「どわあ!？」

「うひゃあ!？」

二人共々驚き上条はベッドに埋もれ、少女は後ろに倒れこみそうになったが車椅子を操作して立て直した。

「びつくりしたあ〜」

「次から次へと、なんなんでせう?」

上条が体を起こし、一緒に驚いた相手（少女）を確認する。まず目に入ったのは茶色の短髪。これだけだったらいつも街で見かけた途端に電撃を放つ女子中学生を連想する。そして、次に車椅子が目に入った。

と、車椅子の少女が見つめている。というか睨んでる？

何事かと聞こうとしたら、

「おにいさんなんで目え死んどるん?」

「.....ええ」

生まれつきです仕方ないんです!と口の中で叫ぶ上条を、出会い頭に失礼な事を言う少女は頭に疑問符を浮かばせながら見つめてくる。

「あら。起きたのね」

病室の扉が開く音で何とも言えない空気が四散した。入ってきたのは白衣を着た紫色の髪の毛の　　というかそれしか特徴がない

妙齡の女医がいた。目の前の少女は女医を見て、「あ、石田先生」と口にしていたのでこの女医さんは石田で良いのだろう。

「気分が悪いところはないかしら？後、色々聞きたいこともあるけど」

「聞きたい事？」

訝しげに眉を顰めた。そういえば何故ここにいるのか。ここはどこなのか。などこちらからも聞きたいがこの人の後でもいいだろう。もしかしたらあの何らかの能力により学園都市の外に来たかもしれないので、なるべく当たり障りのないように応えておこう。

検査をしてあーだこーだと体調について受け答えをした後、

「……あなた、天井を突き破ってきたって本当？」

石田の言葉に目を丸くした。石田は何かを探るように上条を見る。よくよく考えると、今の立場はかなり不審である。

さらには天井を突き破ったとなればもう弁解できそうにない。

「説明してくれるかな？」

満面の笑みのはずなのだが、背筋に氷が這う感覚に襲われる。下手な答えを言えば……考えれない。

「あ、あのですねっ、木に登って落ちたと言っか」

「はやてちゃん住宅街に住んでるからそこまで高い木は無いですけど」

「……友人と屋根に飛び移って遊んでいました」

「友達とだつたら見舞いの一つくらいあると思つわ」

「……………空から落ちてきました」

「あら、だとしたら地獄のリハビリの準備を」

……………、

元来、嘘が下手で誠実純情な（自称）上条さんには話術で誤魔化せるわけが無い。しかも最後は本当の事を言ったのに一蹴された。石田が論破するたびにそこだけ重力が変わったように沈む上条を見て、少女は肩を震わせていた。

「……………話しにくいなら良いわ。決心がついたなら言いなさい」

親切な彼女に助け舟を差し出され、ほっと息をついた。病室から出て行こうとした石田はふと思いついたように振り返り、

「それと、治療費や入院費は心配しなくても良いわよ」

「は？どういふことですか？」（上条さんは不安でいっぱいなのですが……………？）

「その子が全部払ってくれたから」

聞き間違いかと石田が指差した方向

車椅子少女を見る。

あははと屈託のない笑顔を向けてきた。

やめてください上条さんは汚れているんです、と悶えている上条に更に言葉を投げかけた。

「その代わりにはやてちゃんの家に住る事、だそうよ」

「オマチクダサイ石田様。何故にそのような話になってしまわれましたか？」

「あなたが突き破った屋根の修理」

わなわな震える上条に石田は少し疲れた表情で語る。

曰く、彼女自身が頼んだ事で治療費は負担するからお詫びとして屋根を修理させたいそうだ。

そして、修理の間、彼女の家に住まわせてもいいと。

「自分で言うのも変だろうけど俺かなり怪しいでしょ。絶対」

すると石田は上条に近寄り、

「初めは私も反対したんだけど、はやてちゃんが聞かなくて」

石田は当初はやてから「少年が屋根突き破ってきたから助けて欲しい」と言われて訳がわからなかった。さらには身元不明な少年をうちで預かりたいと言ってきた。

理由を聞くと、

『流れ星にお願いしとったら落ちてきた』

流石に身寄りの無いはやてと知らない少年を一つ屋根の下で暮らせるのは心もとない。

(話せない事が気になるけど、人柄はよさそうね。あの時のはやてちゃんったら)

先日、はやてが必死に懇願していた光景を思い出しながら、惚れちゃったかしら？と二人に聞こえない音量で呟いた。

「しばらくの間だけどはやてちゃんをよろしくね」

「……うん？それで良いのか……？」

少しの間考えたが、やめた。

この人達はお人好しだ。ここで断っても無駄だろう。

「自己紹介もせえへんやつたな。あたし八神はやてゆうんよ。はやてでええで」

「ええ」と俺は上条当麻です。よろしくお願いします」

独特な関西弁で明るく挨拶するはやてと不器用に何故か敬語で挨拶を返した上条当麻。

幻想殺しは車椅子の少女と出会った

プロローグ（後書き）

石田幸恵の性格はこんなのでよかったのでしょうか

魔術師……なんだよな？（前書き）

2話目投稿！うえい！

漫画やアニメの条例が決まっちゃいましたが皆さんの周りはどう変わりましたか？

魔術師……なんだよな？

ほどなくして退院出来るようになった。それまでに、戸籍の無い上条の事などのゴタゴタがあったが。

「しばらくの間、お世話になりました」

「退院おめでとう。 はやてちゃんをよろしくね」

その言葉に苦笑いする上条に石田も微笑みかけた。入院中一番気にかけてくれたのは何だかんだ言って石田だった。

「当麻とくまさん！早よ行くでえ〜！」

独特な関西ボイスと間延びした声に呼ばれて、石田に一礼して歩みを進める。石田と共に見送りに来ていた看護婦達は悔しそうな表情だったり、顔を若干赤らめていたり何故かと首を捻る上条だった

「そうそう。上条君！」

不意に石田に呼び止められ立ち止まった。何か忘れたものでもあったのだろうか？と振り返った時。

「よくここに通りそうな気がするから、気をつけてねー！」

そんな石田のセリフにガクツと崩れ落ちるのを踏ん張って、苦笑するはやてに着いて行った。

「 見つからない？」

上条当麻が病院から出たのと同じ時刻、同じ海鳴市の街中で180度回るのではないかと言うほど首を傾げていた。

金色の髪を揺らしながら何かを探すようにタツタカ歩き回り、何かを見かけるたびにそう呟いた。

その格好は都会にまったくと言って馴染めていなかった。黒い短パンと学校で着るようなYシャツの上に宗教的な模様が施されたケープを羽織っている。

顔のほとんどを覆うフードが異様な不気味さを醸し出していた。

それなのに、誰一人として視線を送らない。

誰の目にも映っていない。

(……相手はほんの数秒で術式を壊した人物。油断ならない)

誰にも映らず、気付かれず、ただ一人隔離された空間を突き進む。

一方ニコニコと満面の笑みを浮かべるはやてと車椅子を力無い表情で押す上条は。

「　　」

「なあ八神。八神んちって　　」

「当麻さん！」

さっきまでの上機嫌な鼻歌から、眉根を寄せてむうくと唸りだした。何がいけなかったのかわからない上条はなにをした俺？と身構えた。

「あたしのこと“はやて”って呼んでええ言うたやん。……一つ屋

根の下で仲睦ましく暮らすんやし」

「いやなんつーか、女の子を呼び捨てするのは上条さんにとってひつじょーに気が引けるのですがって最後に聞き捨てならない一文が出てきた気がするのですが!？」

「いややわ、かわいい女の子なんて」

上条のツツコミに対してはやては頬に手を当ててイヤンイヤンと体をくねらせていた。はやての様子を見て呆れる上条はさつき何故嬉しがっていたのかを聞き、はやての語った胸のうちを思い出した。『誰かと一緒に家ウチに帰っても結局一人ぼっちゃやし、一緒におると楽しいやん』

その時、たまたま石田が近くに来ていてこっそり聞いていたりする。彼女の表情は悲しげなような、しかし安心しているようなものだった。

「ふう……」

自分の知らぬ間に妙な信頼を築かれた上条は複雑だった。ずっとは居られない。

上条は帰らなければならぬ。

ティーカップみたいな白い修道服のシスターが心配しているだろうか。

ただ、10歳ほどの子供が願った夢が現実になってしまったというだけの話。

ただ、その対象が上条自分当麻だったという話。

(……俺も帰んなきゃならない場所がある。 けど、はやて

のことも放っておく訳いかねえだろ。学園都市に帰る日が来た時、

こいつの手を振り払えるか……?)

そして考えた。

もしかしたら叶わない夢のままが良かったんじゃないか、と。

「? どうしたん難しい顔して?」

「いや何も無い」

上条はただ一人で考えるしかなかった。

自分でも気付かないうちに顔を険しくして、はやてから不安な眼差しで見られているのにも気付かなかった。だんだんと二人の間に不穏な空気が漂い、

「くくく」

何処かの言葉で唄われる歌で上条は思考の深みから浮上した。

聞こえたのは変声期前の子供の声だった。普通なら気に留めなかつただろう。

だが、何かおかしい。

上条に正体不明な不自然さが襲う。

顔を上げて声の主を探して、呆気なく見つけた。黒い短パンに白いケープ。その下に恐らくだがシャツのようなものを着ていて、不気味なフードを被っている少年か少女かはわからない子供。

そして、違和感の理由もわかった。

始めは黒魔道士のコスプレのような格好だったので、そういうものがここでは流行っていると思った。

しかし違うだろう。

側をすれ違う人は誰一人振り向かないのだ。

コスプレは他人に見られて楽しむものだ（と、上条はそう思っている）。だから街中を歩けば自然と注目を浴びる。

と、数メートル先に居る子供が陽気に歌っていた歌を止め、顔をこちらに向けているではないか。心臓を鷲づかみされた錯覚に陥り、視線を逸らそうとするが蛇に睨まれた様に動けなかった。

見透かそうとする目に肺がうまく機能しない。

体の隅々を観察される視線に身体が縛り付けられる。

「当麻さんまた考え事なん？」

はやての声で束縛から解放された。糸が切れたように膝を落とすが、地面に着く前に建て直した。その様をはやては気分が悪くなり立ちくらみを起こしたと勘違いして、上条に近づき背中をさすってやった。

「石田先生のところ戻らへん？顔真つ青や」

「大丈夫だ……少し頭痛があっただけだし」

「なんやて！？今すぐ救急車呼ばなっ！」

「……、別の理由で頭痛がしてきたぞ」

はやてのボケに対応する気力も無くなり、またため息を吐いた。

視線を子供の居る方向へ向けると、まだこちらを見ていた。

「早く行くぞ。着いてから休めば治るだろうから」

ちよつと言い方が横暴だったか？と思い返したが、はやてはそこまで気にしていなかったようで笑顔で歩を進めた。その後ろで不気味なフードの子供が着けていた。

「　　」

原因を見つけるために街中をふらふらとしていた。気晴らしに故郷の古い歌を歌っていても、その原因も見つからない。結界が壊れた箇所から円を描くように順番に調べたが、魔力の欠片さえ無かった。

（あゝ早く教会に戻りたいっ！ この格好蒸し暑いんだよね、かなり。面倒事を持ってきた奴見つけたら一発くれてやる！）

不満たらたらな思考をするが、言ってもしょうがないと結論付けた。

（もう諦めようかなあ　　！？）

刹那、

在るはずの無い視線を感じた。

霊装“顔なき王”は即興ではあるが気配遮断用の霊装。自分を完全に隔離する状態にするものだ。あちら側には全く見えないし聞かない。こちら側から触らない限り気付かれない。更に言えば魔術師でも見つかるとはほとんど無い。

視線の主を探して、人の隙間から見つけた。背は自分より高く、ツンツンした黒髪が特徴の男。どこかの制服を着ているので学生だろう。恐らく、高校生。一番気になったのは、

（……魔力を微塵も感じない……？）

脚運びや格好も魔術師とはかけ離れてる気がする。そう装っているなら話は別だが。

「当麻さんまた考え事なん？」

ふと、高校生に話しかける人がいた。車椅子の茶髪の少女。たしか教会の近所、というか結構遠いような近いような距離に住んでいる娘だったはずだ。

(……ロリコンか？ しかも面倒事が増えた……)

正直面倒くさい事になったと思った。

あれこれ関わりと別れが悲しくなるから。

彼らはまた歩き出した。

もう気付いているだろうけど着けて行くことにした。

着けて行ってしばらくで目の前の人間の正体が大体わかってきた。

(本当に一般人だった)

そう判断できたのは、まず一つに十字架などの魔術的要素の物品がないからだ。自分も魔術を行使する身。一つや二つそういう物に身に着けている。また魔術師なら謎の人物を排除する^{自分}ため行動を起^{アクション}こすだろう。

しかし、疑問も増えた。

何故このツンツン頭の青年は霊装に包まれた自分を見つけられたのか。

見破られない自信があったが、こうあっさりで見破られると気分もガタ落ちだった。ハア、とため息を吐いて、

ガラスが割れるような甲高い音がした。

ん？と顔を上げると、

身に着けていた霊装が全て壊れていた。

魔術師……なんだよな？（後書き）

裏話

実は入院中にもふらぐを立てているという裏設定です。

こんな感じに……

ガチャ

「ハア、ハア、何で、はやてから、追いかけたんだ……？」
そして見回すと、

「……」

不運な事に着替え中の看護婦さん達がいる更衣室に……

「……ええー、わざとではありませんのでございますが……すいませんでしたー！！」

こうして看護婦+色気が無い発言で怒ったはやてとの鬼ごっこが始まってしまったのだ。

「……リハビリはいらわないわね」

石田は遠い目でこの騒動を眺めていた。

どうでしたか？

上条の高校の女子のほとんどにフラグが立っているというところで妄想してみました。

海鳴市は今日も騒がしい。(前書き)

色々修正しました。

インフルエンザですが元気です。

海鳴市は今日も騒がしい。

何気に右手を振ったただけだった。そして、その手がちょこんと触れただけだった。

それなのに何故……？ そういった感情が渦巻く。

魔術師ならば、霊装を破壊する場合、何かしらのアクションをするはず。ましてや複数も身につけてる自分に触れるだけで全て壊すなんて自分が知る限りありえない。

そして、今装着している霊装は、

「……、」

周囲の人間に見えないと暗示させ、姿を見せなくする『顔無き王』。私服を弄って霊装化させた『歩く教会（偽）』。纏うだけで身体能力を上げる、結界の探知した物体を知らせる、念話をするなどの霊装を身に付けているのだ。

それ以外何も身に付けてなかった。
詰まる所、

「……………ツツツ！！！！」
「糸纏わぬ姿
素っ裸である。」

そうさせた原因の相手が何かを言っていたが、気にして入られなかった。

霊装をどうやって破壊したのかを聞くよりも前に、今直ぐこの場から逃げ出すことしか頭に無かった。

堂々と尾行する魔術師らしき人物の様子を伺いながら八神邸に向かう上条当麻。かみじょうじょうま

一緒に居る八神やがみはやてには見えていないらしく、上条としては後ろに着いて来る人間からの不安が無いため大いに助かった。

(……こいつの目的は何なんだ?)

第一に相手の目的がわからない。考えられる可能性としたり、この学園都市の無い何処かの異端である上条自身だろう。

病院で調べてみると学園都市というものは存在していないことが判明して四苦八苦していたのだ。

まさか幼いはやてが魔術に関わっているはずもない(かもしれない。14歳で2mを越す魔術師や23歳でランドセルが似合いそうな高校教師が居るから)。

ふと後ろの魔術師らしき人間を一瞥した。不気味なフードを被ったままだが、端に見える唇が微かに動いているのを確認して、身構え

「当麻さん当麻さん。今晚のオカズなんにするん？」

「は？ ああ、別に何でもいいんだけど……」

「適当にはぐらかすのはあかんよ……って、なにしとん？」

はやての問いかけに気を抜かされた。何か行動をする前に右手を盾に突き出していた上条を、不思議に思ったはやては突き出した先を眺める。誰が居るでもなく、何があるでもなく突き出された腕は現実に無いものを掴んでるようにも見えた。

「いや、何も」

慌てて誤魔化そうと口を開き、右手を下ろした。その際車椅子を押すスピードが落ち、

ちょうど右手が触れてしまった。

バシッと小気味良い音がして、上条が感じた違和感が無くなった。

「……………」

初めてあらわになった顔は、あどけない少女であった。インデックスに近いヨーロツパよりの顔立ちで陶磁のように白い肌が、金色の髪の色合いを引き立たせている。驚愕によって大きく見開かれた瞳は赤と薄い桃色に光っていた。

仮面が壊れた後、胸元が見えた。

服装の崩壊は止まらずに、ついには全て肌身から離れる。

上条も唐突の事で頭が追いついていない。はやては上条が何かをしたとは考えず、いきなり目の前に同い年ぐらいの少女が裸で現れて驚いていた。

服がずり落ちる光景がスローで見え、落ちるにしたがって少女の顔が紅潮していく。

「…………… ツツツ！！！！」

「おいつ、ちよっ ……」

「いやアアあああああああああああああああッ！！！！」

子供特有の甲高い声が街にこだまする。傍にいた上条はその甲高い声をモロに喰らい、視界がグラグラと揺れる。

頭に残る不快感が無くなった時、すでに少女は消えていた。

「な、何や今の…………？」

同じく少女の近くに居たはやては目を白黒させる。上条としても今の状況を説明するのは難しい。

ふと、街中の喧騒が嘘のように静かになっていくのに気付く。それもそうだろう。

はやてのようにいきなり現れた所を見ている人間を除くと、上条が少女を公衆の面前で服を脱がしたという見解になってしまうのだから。

沸々と痛い視線が増えてくる。

「当麻さん」

「これはもしかするともしかしなくてもマズイ状況では？」

そして、その何人かが携帯を手にし、何かを喋っているのを視界に捕らえる。

二人は視線を合わせ、視線だけで会話し、視線を張り巡らせて目が無い場所を見つけ出し、視線をそこにロックオンして車椅子を押し駆け出した。

「ああああああああ！ 不幸だああああああ（やあああああああ）！」「ああ（！）」「」

甲高い悲鳴と打って変わって、二人分のお決まりの悲鳴セリフが海鳴市をこたました。

「……………つ……………」

さめざめと泣く魔術師。興味がなさそうにあくびをする猫。

霊装が見つからない自身を崩され、いきなり服をひん剥かれた羞恥心で死にたい気持ちになっていた。

因みに服は修道服に着替えてる。

(公衆の面前で衣服を剥ぎ取るとかありえないし!! なに!?)

そういう趣味なのか!? 精神的に責めて最後には……ッ! 折角作った霊装無駄になったし、女の子っぽい悲鳴上げちゃったし……

……恥ずかしいホント……)

的外れな想像で押し潰される。同時に魔術師の中では上条「変態」という方程式が出来上がったようだ。

そんな中、猫は下らなそうにミャ と一鳴きしていた。

「ぐ……っ、今その言葉はキツイからやめて欲しい」

再び膝を抱え、完全に堕ちた。

猫はフンと鼻を鳴らし、何事も無かったように体を丸めて寝る体制に入った。

不可思議な逃走劇によって大幅な遠回りをしてしまった上条当麻と八神はやては、さらに不良に追われたり、はやてが巫女服狐のコスプレした子供の尻尾を踏んで何故か上条に雷が落ちたり、躓いて大和撫子の胸にダイブしてしまい傍にいた武芸者から殺人宣言され逃げていた。

「当麻さんって、ホンマに不幸なんやな」

こんなちびっ子にまで暖かい目をされたー、と呟いて車椅子で体

当たりされたりもした。

そして大幅に時間を食いながらも、八神邸に着いた訳なのだが

「さっきの人に謝らな」

「.....は？」

言っていることをうまく消化できない。軽く部屋の案内をされた後、そういう話を切り出された。さっきの人というのは、恐らく上条をついてたあの魔術師だろう。

「やっぱりなあ、服ひん剥いたのに謝ってもないのあかんと思う」

「ま、まあそうだろうけど」

というか謝る前に逃げてしまったので不可抗力では？と疑問に思う上条だった。

「せやから早いうちに謝罪せな」

はやての言うことにも一理ある。上条の経験上、後から後からになればかなり面倒なことになる。

「ってか、あいつの家とか知ってたりするの？」

「知らん」

即答かよ、ツッコミを入れた。

「でもなあ、何か十字架の刺繍みたいなもんあったやん。もしかしたら教会の小僧さん思っんよ」

それは教会じゃなくてお寺だ、と思いながらはやての洞察眼に内心驚く。さらに少ない情報から、的を得る推理をするはやては結構頭の良い方かもしれない。

というのが顔に出ていたのか、胸を張り、いかにも『あたし、やりましたよ』な表情を浮かべるはやて。

石田などの彼女をよく知る者は彼女のとても嬉しそうな表情を見て驚くだろう。

無理やり作った笑みなどは一欠けらの無い笑顔を。

「決まりやな！ はいこれ持ってお行き^ゆ」

「おかあさん!？」

どこから持ってきたのか折詰を渡し、妙に優しげな目で送り出した。

というか一緒に行かないのかと嘔み付くと、

「いやな、ほら、そういうのは年上の仕事と言うか、10歳の子供たるあたしには荷が思いと言うか、同い年よりも年上の人の方が向こうも話しやすくない？ それに大人を頼るのは子供の特権や！ 頼りにしとるでお兄ちゃん」

歯切れの悪い返答が帰ってくるので渋々出て行く。

正直はやての『お兄ちゃん攻撃』で上条に多大なダメージを負ったことは本人だけの秘密にしていたかった。

因みに何処かにいる義妹魂シスコンは上条の状況をいち早く察知し、心底悔しそうににやーにやー叫んでいた。

はやてに貰った地図と聞き込みによって、町外れの少々寂びれた教会に到着した。

教会は魔術師の根城とも言える。そこに乗り込むのだ。

無論上条に魔術師と争う気は毛頭ない。

(……ここはなんなのか聞かなきゃならない)

何故学園都市が無いのか。

何故十字教のような宗教団体が無いのか。

そして、何故魔術師が居るのか。

聞くことは山ほどある。

疑問の突破口である魔術師とはなるべく争いは避けたかった。

「……………うっし！」

意を決して扉を開き、

すぐさまバックステップで離れた。

銀色の点が上条が立っていた場所を貫いた。

扉は勢い良く開くと同時、鉄のぶつかる音が飛び出す。ガチガチと耳障りな音が真っ直ぐ上条に向かう。

脳内の警報が左に飛べと告げる。そのとおりに転がると首があった座標に横薙ぎに銀の一線が奔った。

顔を上げ、ようやく確認できた。金髪に虹彩異色症^{オッドアイ}。先ほどの魔術師だ。手に持つ獲物は騎士が持つような5mほどの騎乗槍^{ランス}である。通常の長さ(2m)でも結構な重量があるのだが、それを片手で扱う本人も異様だった。

「俺は争いに来たんじゃない！」

「……………」

戦いの意思がないことを伝えるが少女の目は変わらない。むしろ警戒心が高まっていた。ハア、と深いため息を吐き、はやてから預かった折詰を置く。こうなった以上本気で説得しなければわからないと思ったから。

二人の出会いは、正史とは違う世界をどう変えていくのだろうか

海鳴市は今日も騒がしい。(後書き)

裏話

「ハンカチティッシュ持った？ それからこれウチの電話番号や。家わからんようになったら交番か公衆電話でかければ出るからな。せや、この巾着絶対手放さんようにな。困ったときに開ければ何とかなるから」

「だからおかあさん!？」

妙に子ども扱いされる上条だった。

はい。母性MAXなはやてでした。

海鳴市の一日は終わる(前書き)

つたない文ですが、感想・評価をください

海鳴市の一日は終わる

タンっ！と地面を蹴ったのは魔術師の方だ。直線的な移動だが獲物が長い間、距離は容易に覆されてしまう。

辛うじて見える速度で迫る点の攻撃。狙いは脚、胴、胸部の3点。

「ぬおお!?」

真っ先に狙われた脚を引くと前のめりに倒れこんだ。倒れこんだことで体に風穴が空くことは避けれたが、むしろ状況は悪化している。

うつ伏せの体勢のまま転がる。ザスッ！と上条がいた場所に深い穴が出来た。

背筋を冷やし、ごろごろと転がり距離を離れた。

その間魔術師は訝しげな表情で睨んでいた。

(……マズイ。相性が悪すぎる)

上条当麻の幻想殺し(イマジンプレイカー)は異能の力以外のものは消すことが出来ない。その性質により能力や魔術を使わずに戦う相手に対しては、喧嘩っ早い普通の高校生に成り下がってしまうのだ。

今は教会の端、塀に囲まれているため袋小路の位置にいる。

深く踏み込んで広いスペースに駆けようとすると、魔術師も槍で威嚇のつもりか突き出す。

魔術師としても迂闊に手を出せない。

なんせ自身の想像できない方法で霊装を破壊した人物。油断したらこちらが喰われてしまうから。

「まで！ ここで争う理由は無いだろっ！」
「……………」

上条のとつた行動は単純。今の自分の状況を伝え、戦闘を終えさせるというものが、警戒心Maxな魔術師にとっては意味がわからないといった表情で眉をひそめている。

そこへ上条当麻。

特有のスキル、『デリカシーゼロ』により、例によって地雷を踏んでしまうのだ。

「まずここに来た理由は、さっきのことに対しての謝罪だ！」

と、言い切ったところでピシッと硬直した。無論上条は気づいていない。

続いて出てきたのは本当に謝罪の言葉だった。『街中で解いたのはこちらに非がある』だの、『けど、決してわざとじゃない』だの言葉を並べているが、耳に入っていない。

「……………」

ぼそぼそと魔術師が何か呟く。呪文かと思わず聞き耳を立ててみるよ、

「I kill you？」

ゴガっ！と。

わき腹に衝撃を喰らう。本来の使い方ではないため、骨に異常は無いようだ。

先ほどの鋭利さはなく、雑な大振りの攻撃に切り替わった。

不思議に思った上条は顔を上げ、魔術師を確認した。先ほどの無表情から一変して、口元が大きく吊り上がり、白い肌は紅潮し、赤と桃の目のハイライトが消えていてとても怖い。

「I kill you! I kill you! I kill you!!」

「ラブコールみたいな声調で言っても、結局は不吉な殺人予告だからな!？」

興奮して振り切った槍は容易に避けられ、壁に叩きつけてしまう。その所為で槍の先が折れ曲がったが、軽く足を上げ地面を叩くと折れ曲がった槍が小振りに見えるほどの長さを持つ槍が影から飛び出した。

剣などの武器、特に長物は手先で扱うナイフなどと違って、細かい動作が難しいという弱点がある。だから、相手の懐に入れば攻撃に転じることが出来るだろう。熟練の達人は様々な技術で克服していることがあるが。

「ふっ!!」

膠着状態に痺れを切らした魔術師は軽く息を吐き出して突撃してきた。

一番隙の大きい突き。

それと同時に上条も前が出る。

上条の行動に一瞬怪訝な表情を見せたが、ふっと同情する顔になる。

諦めた、もしくは決死の覚悟で挑むのか、と。

突き出された槍の延長線上は上条からかなり逸れて、上条が走り出しても刺さる事無く後ろの壁に突き刺さる。

槍が震える音を肌で感じながら懐に入り込む。

魔術師がそれを見た時、顔を歪ませた。

先ほどもちやくちやに振り回していた時に、ルーンを刻んだ小石を口に含んでいた。見る限り相手は一般人。軽い隙を見せたら簡単に食いつくだろう。

勝負あった。

口に含ませた懐刀を吐き出し、

そこから魔術師にも予想できなかった展開が起こった。

吐き出した小石は確かに燃えて上条へ飛んでいった。

ただし、直線状に置かれた手によって阻まれ、その手を焼き尽くすはずの1000度の焰がかき消された。

「ツツツ!?!」

予想もしていないことになり動揺して上条を見た。しかし、目の前には手が迫っている。

慌てて槍を引いて反撃しようとしても遅い。せめてバックステツプで距離を置こうと足に力を込めた。

が、その前に上条の手が速く顔を覆った。

急に槍を重く感じて手放す。ガアン!という音が響き地面に落ちた。

身体補強の魔術が解けたためだ。

バックステツプ時に通っていた魔力もふっと消えて、地面を背に叩きつけられた。ついでに言えば、小石が口に押し戻されてしまった。

「だから、話し聞けつてえの……」

上条としても子供を殴るのは気が引けたので、こつこつと終え方で

ホツとした。

事情を説明しようと魔術師に近づくと、魔術師は顔を真っ赤にさせ、手足をバタつかせている。

「もつと落ち着けよ。取って食うわけじゃないんだし」
「~~~~~」

……何かがおかしいので耳を近づけてみた。
こひゅーこひゅーと息が詰まったような音が聞える。
ルーンに使った石を喉に詰まらせたらしい。

「おおい！？ 何がどうなったんだ!？」

顔を掴んだ拍子に口に小石がたまたま入ってしまったので、上条からしたら何故こうなったのかわからない。

そこからの行動派速かった。背中を手を回して抱き起こし、軽く背中をさすったり、叩いたりしてみた。それでも効果が無かったので、胸部の真ん中を思いつきり叩き込む。

すると、魔術師は大きく咳き込み、口からピンポン玉大の塊を吐き出して、ようやく息が落ち着いてきた。

ふう、と一先ずは安心した上条だったが、それだけで……………
(終わらない)……………(のが上条当麻である)……………。

何処にスイッチがあったのか、鎧となっていた服が幻想殺し(イマジンプレイカー)によって壊された。

そして、繰り返される惨状。

「!」の「!」

今度こそ魔術師の槍は上条にクリーンヒットした。

魔術師との壮絶な戦闘^{バトル}は、胸にもやもやしたものを残して終わり、春先でも寒いので教会の中に入ってから話し合うことにした（因みに教会につけられた術式が破裂し再び魔術師を困惑させた）。そして、

「……………」
「……………」
（き、気まずいイイっ！）

魔術師は一言も言葉を発しないので、話が始まらない。かと言って上条からは何も言えない。明らかに魔術師は不貞腐れている。その理由を作ったのは上条自身である。
ふと、持ってきた謝罪の印を思い出し、とりあえず魔術師の前に出す上条。

「え、つと、食うか？」
「さつき石を食わされた」

即答された。やっぱりかと思い、差し出した温泉饅頭を手前に引き戻そうとすると、ガツと重さを感じた。
見れば、魔術師が折詰の箱を掴んでいた。しかも、がっちり掴んで放そうとしない。

「……………」

「.....」
「.....」

ただひたすらにはやてが送った折詰（中身は温泉饅頭。何故？）をもしやもしやと無言で？き込む。

一通り食べ終えて口の周りを餡子だらけにした魔術師はふうと息を洩らす。気が紛れて落ち着いたようだ。

「ごちそうさま。温泉饅頭なんてはじめて食べた」

「そりやどうも」

「用が終わったならさっさと帰れ」

「ひどい突き放し方だな！」

「冗談。何の用があつて来た？」

口元を手で拭いて目を細めながら、

「まっ、大体ここに来る理由は一つしかないだろうけど」
でなかったら好んで教会根城に来たりはしない。

魔術師はふうと一拍置いて、

「わかつてると思うけど君のいた場所じゃない。君から見たら過去か現代かわからないけど。そう、平行世界とかいう奴だと思っていれば良い」

魔術師の説明は続く。

十字教が無いのは別の名前になっているため。

魔術は一切無い。

超能力はあるがテレビで低能力者が出る程度。
ある程度話しを聞いた上条は思い切つて聞いてみた。お前は何者なんだ、と。

「まだ言つてなかつたな？ 元赤枝の騎士団に付属していた、今の名はフルール・テイルケト。愛称で呼んでくれたら嬉しいな。そして、この世界ではただ一人の魔術師」

己の不幸が最高潮になった気がする。前にインデックスに興味本位で異世界旅行が出来るか聞いたところ、

『並みの術者が百人いても無理かも』

とのたまっていた。目の前にいる魔術師がどれほどの力量を持っていたても一人じゃ到底無理な話だ。

上条の心情を見透かしたかのように口を開く。

「何故私がここにいると思う？ それについてはある程度ツテがあるから心配するな」

ポカンとだらしなく口を開けている様が滑稽だったのだろう。口元を押さえてぷつと噴出したフルールに拳骨を喰らわせる。

目を潤ませ拳骨が落ちた場所を押さえるフルールが言うには、世界を隔てている『壁』のようなものがありその『壁』は時折変動して形を変えている。変動する拍子に低確率で、人を飲み込む事があるという。

人は神隠しと言つたりする物だそうだ。

そして目の前の魔術師もその被害者であつたらしい。

「……お前、何歳なんだ？」

「何処かの本で書いてあつたが、平行世界というのはもしかしたら

の世界だとか。つまり違う可能性の自分が住んでいるかもしれない。同じ人間が二人もいればおかしいだろう？」

言っている意味が補修常連者（レベル0）の上条にはさっぱりわからない。

「つまりは、世界を変えれば自身の体にも何かしらの影響が出るって事だ。……私も、見た目の割りに年を食っている」

フルールの背後にどんよりとした何かが渦巻くのを幻視した上条はなんだか居た堪れない気分になった。フルールの話が本当なら、本当はナイスバディなお姉さんかもしれないから。

（……なんか表情豊かだな。俺の知ってる奴らとは大違い）

「……あとは？」

「ああ、戻る方法を教えてくれ」

「色々すれば出来る。疲れるけど」

いくつかの簡単な質問を交え、今日は八神邸に帰ることにした。

準備期間があるそうで、その間はどのような事も出来ない。というのが魔術師兼、研究者兼、考古学者の答えだった。

随分と職業が多いなと胸の内ですっコマを入れる上条だった。

「所で、踏ん切りはついているのか？」

教会の錆付くフェンス状の扉が悲鳴を上げた時、フルールは上条に問いかけた。まるで厄介なものを見るような目で。

「……………はやての事だろ」

帰る方法がわかった時点で上条の問題は減った。最大の悩みは残ったままだ。

はやての事を知ってしまうと手を引くのを躊躇ってしまう。

かといって学園都市（向こう）にも守りべき存在がいる。

「……まだ、わかんねえよ」

だから、そう答えるしかない。

「関わっちまった以上、無視することなんて出来ねえよ」

どこかで既視感デジャヴを感じた。上条はよく知っている。

「虚勢張って、他人ひとに迷惑かけないように一人で抱え込んでどこか危なっかしいんだ。だから」

「放つて置けない？」

上条は何も言わず首を縦に振った。上条の中に渦巻く、速く学園都市に戻りたいがはやてを置いておけないという矛盾ジレンマ。

この時フルールが自分に向けていた感情はわからない。ただ上条を良く思っていないのはわかる。

「まだ答えが見つからないんならその日が来るまで悩み続ければ良いことですよ。教会は迷える子羊を導く場所。いつでも聞いてあげるよ。この際妥協してここに居座るっていう手もあるけど」

一言わかったとだけ言って、上条は八神邸に帰路に着いた。

『むっ！ 名前と電話番号聞くの忘れた。……まっいつか』

「お帰りなさいませ！」

「お、おっ」

八神邸に着いて扉を開いた途端にフルテンションのはやてに迎え入れられた上条は、異様なテンションのはやてに若干引いた。

「そこは『ただいま戻りましたご主人様』やろ〜」

「上条さんにそこまで求めるのは無理でせうよ?」

それだと先に言った『お帰りなさいませ』と繋がらないのでは? という疑問に駆られたが、深く考えない方がいいのかもしれない。家屋は外から見たとおり広く奥行きがあった。上条の住む学生アパートとは比べ物にならない。

(つか、比べてどうするんだ?)

「まあ席について」

独特の関西ボイスに導かれ、イスに座った。ちよつと待ってて、と部屋の奥に向かったはやてを疑問に思いながら素直に待っている。と仄かに香ばしい香りが鼻につく。

「おまたせー! とちよつと手伝ってくれへん?」

はやてのマイペース振りには慣れたものだ、と自分を褒めたい上条だった。

立ち上がって声のする方向、キッチンへ赴くと、そこは男の夢(理想郷)が広がっていた。

「これ一緒に運んでくれへん?」

女子の手作り料理。男性なら誰もが夢見るであろう魅惑なもの。それは高校生活を謳歌する上条にとっても同じことだ。

ただし、その相手が小学生のはやて。

(何だろっこのもやもや感は?)

(何やるっこのいらいら感は?)

「は、早う食べよう」

「そ、そうだな」

何か通じ合ったらしく、お互いそれ以上追及しなかった。

否応なしに慣れた病院食よりも暖かな食事の間、はやてはニコニコと上条を見つめ続け、上条も『ウマーッ!』と連呼していた。

ただ、はやてに見えないように上条は複雑な顔をしていた。

海鳴市の一日は終わる（後書き）

関西弁のキャラクターが出るとシリアスが難しいです。……でてなくとも難しいですけど
やっとリリカルなのは世界の主人公となる人物を出せました。

第一章 始まりの無印 A | f | i | r | s | t | s | t | o | r | y (前書き)

原作突入です

なるべく早く投稿したい物ですね……

とりあえずシナリオ的に原作乖離しそうなのでキーワードに追加します

第一章 始まりの無印 A | f i r s t | s t o r y

魔術師まじゆていの朝は早い。日が昇る前に礼拝堂へ赴き、そこから黙禱を捧げる。

ここには魔術師以外誰もいない。こんな寂びれた教会へ来る人間ものずきはいない。

魔術師自身も信仰はするが今は布教する気になれないし、なにによりこの静かな時間は好きだった。

黙禱するうちに浮かんでは消える記憶。

それを振り払うように心を空にする。

それでもポツと思う浮かべる。

先日、こつちに来てしまった迷い人かみじゆていの事だ。

どうやらこの世界は別の次元から人間が迷い込む事が多いらしく、自分は帰らせる術とある人物から習い、それを使って送り帰した。

……まあ、たまに実行使で黙らせるときもあるが。

それはただの自己満足に過ぎない行動であり、彼女の世界を壊したくない気持ちで行っている事だ。当然彼も時期が来たら返す心積もりである。

初対面は思い出したくないが、再び会ってみると不思議な少年だと思っただ。

いくらこの街の人間がお人好しの塊のような人でも、明らかに怪しい人間おしいを一人暮らしの人と一緒に住まわせない。周りが必ず止めている。どんな魅了チャームを使ったのだろうか？ 他にも力作の霊装をあっさり見破り、魔術を無効化させ、霊装を全て壊して

やめよう。無性に魔法名を名乗りたくなってきた。

朝の日差しが目蓋裏まぶたから感じて目を開く。

「……………そういえば、名前……………」

ふと考え、パツとやめた。考えても仕方が無いし、この街に限りまた出會える。

「私の役目はこの世界にとつての異端を排除する事……………。そして、彼女の世界を守る事……………。役目しよとに私情を入れるなんてどうかしてる」

そう呟きながら、魔術師の朝は過ぎていく。

八神邸の朝は異様に早かった。

上条当麻は初めの朝に、適当にパツパと朝食を振舞いますかーといき込んでいたのだが、はやては予想以上に早く起きて朝食を作っていた。流石に居候の身で何もしないというのは、とある居候シスターさんの影が頭にチラついたので、当番制を提示したら渋々承諾してくれた。

現在の八神邸の一日は、朝の始まりを当番で上条かはやてが朝食を作り、午前中屋根の復旧工事、午後をはやてと街へ出かけたり図書館へ付き合ったりして時間を潰し、夕方にはスーパーで主婦と一緒に戦場へ赴いて戦利品を取り合い、最後は色々話し合っつて一日を終える。

どんなに都合主義のどこのギャルゲーの主人公ですかこのやるーとツツコミが来るような生活を送っていた。

当の上条としては、あの魔術師が言うその時までどうする事も出
来ずにいるわけで、さらにはやてにまだ帰ることを伝えずにいる。

この数日ではやては表面的には甘えているが、いつ帰るかなどのは
は一切触れていない。恐らく上条の性格を自分なりに分析して、そ

んな事を言えば自分かみじょうに迷惑がかかると思っているのだろう。
上条当麻はそんな彼女に申し訳ないと思いつながらも今を過すごして
いる。

一方の八神はやては心落ち着かない日々を送っていた。

理由は明白。

上条当麻カミジマについてだ。

何となく思った事が現実になったとは予想すらしなかった。

しかし、現実現実は現実だ。上条はやてにとっての白馬の王子じゃ
ない。

彼が起きて聞いてみればいつの間にかここにいて、しばらく帰る
術がないというのだ。帰る術が見つかれば直ぐに帰るだろう。

だから彼女は願う。今の幸福を少しでも長く居たい、と。

大人びているとはいえ、結局はやても子供なのである。

なかなか話を切り出せない後ろめたさに苦しむ上条と、他人を巻
き込んでまで幸せを求めることに後ろめたさを感じるはやては互い
にすれ違ちがったままだった。

何度も繰り返すが、上条当麻は不幸な人間である。

今の上条の格好は情けないがはやてから資金を貸して貰い買った、
安物の赤色のTシャツとジーパンだ。

いつかはバイトで返すと心に決めてバイト探しに出て行ったのだ
が、身分を証明するものがないことを思い出しトボトボと行き着い
た公園で白い灰になっていた。意気込んだ瞬間に出鼻を挫かれれば
ため息一つぐらい吐くだろう。今の心情は不完全燃焼と言った所か。

(……借りたもん返さないで尚且つ住居を提供されてる俺ってヒモ
決定だろ……)

「不幸だ……」

普段インデックスに家事の一つぐらいしろと言っている分、約束を守れないシヨックは大きかった。

立ち直れないまま帰ろうかと腰を上げて八神邸へ歩を進めた。

はやての奴になんて言おうか。というか9歳に言い訳する高校生は人間としてどうなのか。と考えていたのだが、そんなことは一瞬消え去った。

「……………狸？」

茶色い毛並みの丸まった物体が道のど真ん中にあれば、目にも止まるだろう。

死体だったらそれだけだと素通りしていたが、微かに丸まった生物が震えたり、息をしているように上下に動いていたら話は別だ。

「怪我、してるのか？」

声をかけると答えるように頭を上げる狸(?)。しかし直ぐにはつたり頭を落として苦しそうに呻いた。学園都市の人間の上条は野生動物をこのまま触っていいのか踏ん切りがつかずにしどろもどろになり、とりあえず傍にあった木の棒で突いてみると、

「ぬうあにしてるんじゃないああああああああああっ！」

「べぶあっ!?!」

少女の声と共に突如襲い掛かったハリセンに顔を打ち抜かれノックアウトした

第一章 始まりの無印 A | f | i | r | s | t | s | t | o | r | y (後書き)

五話目を投稿しても感想がないというのは結構不安になりますね……

指摘があればお伝えください

第一章 1 (前書き)

まだ邂逅パートから抜け出せない・・・ちくせう

そういえばプレビュー111000ユニーク2900超えました。
閲覧していただきありがとうございます。

第一章 1

いくら精神的に成熟していて、尚且つ実年齢が大人でも、外見的にも社会的にもまだ子供だ。

「なに感傷に浸ってるのよ？ 正直爺臭いわよ」

フルールは今、聖祥大附属小学校の屋上にいる。さらに言えば三人の女の子と一緒にだが。

「……今月残り千円でどう乗り切ろうかと思ってただけ」

強気な金髪の欧米風の顔立ちの少女、アリサ。バニックスに軽い口調で返す。実際はこの年齢で小学校にいてもいいのか考えていたのだが、今話す内容じゃない。

小学校などの義務教育は社会のモラルや協調性を高める為にあるとかなんとか言っているが、今は必要性を感じない。自分はモラルとか協調性とか充分身に沁みているのに。

とは思うものの、実はこの魔術師。数年前ここに現れた時は日本語もからつきし、銃刀法違反などの法律も無視した人種だった。とある一族のお嬢様の策略によって日本語と現代常識をみっちり仕込まれ、いつの間にもやら小学校の手続きが済んでいて結局入らざるえない状況になっていた。まあ、今でもケータイどころか電卓すらまともに扱えないし、現代文の外来語もそうとう危ういが。

「……ちょっと！ 話聞いてた！？」

「え……っと、何だっけ？」

「どうしたの？ さっきから上の空みただけど」

アリサの左隣、つまり自分の隣の子が訝しげに尋ねた。紫色の髪に力チューシャを付けた物静かな印象を受ける彼女は月村すずか。さらに言えばアリサの右隣にも栗色の髪を左右に結んだの少女がいて、名を高町なのと言った。この3人はいつも一緒に行動している為、クラス公認の仲良し三人組だ。

「いやね。クラスの代表格のような三人娘に、私のような馬の骨が居ていいものかと」

正直な話、フルール「テイルケト」とって深刻な悩みである。

3人が知っているのかわからないが、それぞれに「ふあんくらぶ」なる物が存在するほど学園では有名だ。その中に異物が居ていいのか、迷惑じゃないか本気で思っていたりする。

しかし、

「何処が馬の骨なのよ？」

「迷惑なんかじゃないよ」

「それにフルール君あまり男の子っぽくないから、なのは達といっても自然に見えるって皆言ってるし」

「どーせそこから女の子だーとかオカマだーとか言われるに決まっていますっ」

三者三様の答えが返ってきて、若干へこんだ。特に最後は。

拗ねた口調で不機嫌さをアピールした。

「話し戻すけど、将来のことどう思ってる？」

アリサに華麗にスルーされ、さらにへこむ事になる。このやり取りは聖祥大附属小学校ではもう日常の一つになってしまっていた。

「将来って、さっきの授業？」

「アリサちゃんもすずかちゃんも結構決まっているんだって」

(…………子供は貧乏でも、遊ぶのが主本でしょ)

先ほどの授業は、事前に調べた職業についての授業だった。一度街に出て仕事を見させてもらい(たしか社会見学だったか)、将来になりたい職の参考にするというヤツだ。なのは達の歳で将来に不安があるのはフルールには理解できなかった。

「フルール君はどう思ってるの？」

「私？ ……出来る事が少ないこの体たらくだし、その時に何とかしたいな」

「たしかに何も出来ないわね。あんた魔法使いなんだからさ。手品師でも始めたら？」

「それも手だと思っけど…………」

「そっか…………。皆凄いやね」

ふとここで視界の端に思いにふけた少女の姿があった。

「でも、なのはは喫茶翠屋の2代目を継ぐんじゃないの？」

「うん…………、それも未来のビジョンの一つではあるんだけど…………。他に何かやりたいこともあるような気がするし…………。まだそれがなんだか、モヤモヤしていてよくわからないんだ。私、特に取柄とか特技とかないし…………」

目線を下げたと言った告白に、思わずため息を吐いた。将来のことを悩むのも悪くはないが自分を卑下するのはどうかと思う。…………先ほどの自分の意見は当に頭の中には無かった。年上らしくなのはに軽く喝でも入れようかと腰を上げて、

「バカチンっ!!」

アリサがデザートのリモンの蜂蜜漬けを投げつけた。べちんつ、となのはの頬に当たりベタリと張り付いた。アリサは噴火寸前5秒前といったようにプルプルと震えていた。

「自分からそういうことは言うもんじゃないの！」

活火山アリサ岳、大噴火。

「そうだよ、なのはちゃんしかできないこともきつとあるよ?」

アリサの言い分に賛同してすずかも言葉を添える。

「大体、あんた！ 理数の成績は、この私よりいいじゃないのよ！
それで取柄がないなんてどの口が言うのよ！ ええ？ この口？
この口ー!?!」

なのはに掴みかかり、どう体勢を変えたのかなのはをうつ伏せにさせて馬乗りになって頬をぐにぐに弄くっていく。その間、すずかはどうしようかとおろおろする。

「にゃー！ だってなのは文系は苦手だしー体育の授業も苦手ー」

「ふ、二人ともだめだよ、ねえってば。フー君止めてよ」

なのはとアリサはそう言っているものの、先ほどの不安などはとうに吹き飛んでいた。フルールはじゃれあう二人を見つめ、ただ咳く。

「うむ。若き事は良きことかな」

「あんたいくつよ!?!」

ばしーんっ！と何処から出したかわからないハリセンに頭を叩か

れるロリ爺まじゆじだった。

その日の帰り道。午後は昼休みに騒いだ所為か、なのはは憑き物が取れたように明るかった。しかし、それはあくまで表面上だけ。すずかに言った一言で意識がどこか遠くに行っていた。

（自分に出来る事、自分にしか出来ない事、か）

「あつ、こつちこつち！ ここを通ると塾に行くのに近道なんだ」

「そうなの？」

「ちよつと道悪いけどね」

はにかみながら答えるアリサ。たしかに道なりは手入れされてなく、砂利や大きい石がごろごろと転がっていて歩きにくいだろう。まあ近道なら……、とアリサ他3人は賛同して荒れた歩道へ進む。

他愛も無い話をしながら塾へ歩を進めると、ピクリと2本の尻尾が跳ねた。

通った事のない歩道であるはずなのに、既視感を感じてなのははきよろきよると見回していた。が、その既視感の正体にハツとした。

「こころは、昨夜夢こいゆめで見た場所じゃ……？」

まさかそんなわけがないと振り切ってさらに歩を進めると、

『 助けて………』

頭の中に響く声についに足を止めた。なのはは合わせて三人も足

を止める。

「……ナノハ？ 塾行きたくないの？」

「そうじゃなけど……。今、何か聞こえなかった？」

「何か？」

「うん。声みたいなの……」

もしかしたら皆も聞こえたのかもしれない。そう思って3人に訊ねたのだが、

「別に、聞こえなかったけど……」

アリサを始め、誰も聞いていなかったらしい。

昨夜の夢もありだんだんとホラーじみってきて恐怖感を覚え始めた時また、

『たすけて！』

今度ははつきりと聞こえた。

「こつち！」

「ナノハっ!？」

「なのはちゃん!？」

声を感じた方向へ走り出す。

後ろでアリサ達が叫んでいたが今のなのはには聞こえていなかった。

二回目の声は一回目よりも弱々しくなっていたから。

走って走って息を切らしながらも声の主を探し、そして見つけた。歩道の真ん中に茶色い毛並みの動物が傷ついた状態で丸まっている。

駆け寄ってみるとその茶色い小動物は顔を上げ、なのはを見つめる。その首には赤い宝石をつけていた。

「怪我、してるの？」

そう聞くとクタリと首を地面に落とす小動物。体力が落ちてる証拠だと思ったなのは、どうしようかと考える。

と、思い浮かんだのは一人の魔法使いともたちだった。あの子だったら何とかできるかもしれない。心苦しいが、大怪我している人をあまり動かさない方が良く、公共放送の番組で言っていた気がするので置いて行く事にした。

フルール^{ll}ティルケトは魔術の事を特に秘密にしていない。

出会いが出会いだっただけになおの事だった。

因みにティムが魔術を使えることを知っているのは、高町家と月村家とアリサぐらいだ。

「フルール君！」

走ってきた道を戻っていくと、向こうからもアリサ達が走ってきた。心配して急いできたのだろう、3人とも息を切らしていた。

「お帰りっ！^{たえよう}そしてアリサのハリセンを— Given to y ou—」

ペシーン！と切れの良いアリサのツッコミが入る。

フルールの方に。

「つう……、何で？」

「自分で考えなさい。で？ どうしたの？」

冷静になのはの言い分を聞くアリサ。なのはの慌てようから急を要する事だと察したのだ。

ハツと思い出して事情を説明する。

小動物が怪我をしていると聞いてアリサが直ぐに行こうと言えば、全員で首を縦に振る辺り、結局この場にいる全員がお人好しである。

そして、小動物が居た辺りまで走ってくると、はたと足を止めた。先客が居たから。

ツンツンした髪型でバーゲンで売っているような赤色のTシャツとジーパンを着ている高校生ぐらいの男だ。

実際はその男も小動物の心配をしてしゃがみ込んでいるのだが、遠目で、他人から見れば木の棒で小動物を苛めているようにしか映らなかった。

さらに問題なのは、あの男に見覚えがあつた事だろうか。

「あれ？ あいつ」

「フー君知ってるの？」

すずかは何となく聞いただけだったが、フルールはちよつと違つた。

初対面の時の様子がフラッシュバックされ、一瞬顔を赤く染める。なのはとすずかはよくわからず頭に疑問符を浮かべたが、一人は見逃しはしなかった。

（なんで顔真っ赤にしてんのよ……。っ！ もしかして、結構可愛い顔してるから襲われかけたとか！？ ゆ、許せんっ！ 私の友人になんてことを！）

お つかつかとフルールに近づいて、普段あまり見せない優しげな表か

情を作り、

「フルーラ、あなたの仇取ってくるわ」

盛大に勘違いしたまま、正義感の強い彼女は何処から出したのかわからないハリセンを片手に向かっていった。……フルールの『黒い笑み』に気付かずに。

『
ぬうあにしてるんじゃないやあああああああああああ！

』
『へびあつー！？』

「（……ざまあ）」

「で、盛大に勘違いしたまま仇を取ったと」
「だからこつちも悪かったって言ってるでしょ！」

上条の前には正座したアリサとフルールの姿があった。
持ち前の頑丈さで直ぐに起き上がり、はり倒したアリサと遙か前方でクツクツ笑いを零していたフルールをとっ捕まえて事情を聞いていた。

「いくら上条さんが血に飢えたとしても少女には絶対手を出しません！ 何故ならそれは犯罪だから！」
「あゝ足が限界超えちゃったんだけど」

熱弁をふるっている中、アリサがギブアップを要請する。
彼女の言うとおり足も限界だったし、上条の演説は止めなければ
延々と続きそうだったから。

「……………あつ、あの子はっ!？」

上条の介入で空気と化していた小動物はさっきよりも苦しそうに
呻いていた。

……………十中八九上条の所為である。

「早く病院に連れていかねえとヤバいんじゃないか？」

「フルール君」

「わかった」

右手の親指を軽く噛み切って血を垂らす。

その様子にビクツと肩を震わせるのはとアリサとすずか。ただ、
上条はギョツとした。

儀式の用意をするフルールに近寄り3人に聞こえない声で話しか
ける。

「(……………こんなところで魔術使ってもいいのかよ!? あいつら一般
人だろ!?)」

「どつって事無い。これぐらいならすぐに」

上条の言い分は軽く無視して、血で幾何学な魔法陣を小動物の周
りに描く。それは、悪魔に供物を捧げている図絵にも見えて、上条
は余計に恐怖した。一、二言呟くと、魔法陣が薄く光りだした。

中心に居る息絶えそうな小動物へ赤い光が集まるように、外側か
ら光が消えていく。赤い線の光が小動物まで至った時、小動物の息
が若干穏やかな呼吸に変わった。

その様子になのは達はホッと息を吐いた。

「まあ、応急処置をただけだから、一応病院に連れて行くところか」

第一章 1 (後書き)

今回はここまでです。次回から本格的には入れたらいいな。

聖祥三人娘はフルールのことをそれぞれ

なのは：フルール君（普通に）

すずか：フー君（少し省略した）

アリサ：フルーラ（女性形）

と呼びます。

感想、指摘があったらください。

第一章 2 (前書き)

やっと本編？

第一章 2

その後、最寄の動物病院に小動物を預け、なのは達と別れた。もうすでに日は傾き、茜色の空が広がる時刻。

「この国には知るはひと時の恥、知らぬは一生の恥ということわざがあるそうだけど、的を得ている言葉だな」

魔術師は脈絡も無くいきなりのたまい始めた。

「? …… たしかにな」

とりあえずその質問に同意する事にした。

すると上条の反応に顔を顰め、ピコーン、と擬音が魔術師の頭の中に響いた気がする。

「今は機嫌がいいからどんな質問にも答えてやるぞ。という事だ。つまりは」

何故か胸を張りながらそうのたまった。上条としても釈然としな部分が多すぎて、聞きたい事があった。もしかしたら自分が気付かない内に表情に出ていたのだろうか? もしくは魔術師自身言い張りたいだけか? 子供特有の。

どうあっても、フルールなりの気遣いだろう。

「さっきの魔術は」

「血を媒介のして自分の生命力を分け与える術式。その際自己治癒力もわずかに上がるから、回復魔術としては充分すぎる」

「そっちじゃなくて」

一旦言葉を切り、

「なのはとかいう子達、魔術の事知ってて良いのか？」

「問題無い……、事は無いか。あっちだったら学問だから広めてもよかつたけど、こつちじゃ魔術が無いし、殺しの技だから、見せるだけなら大丈夫。さっきのような奴」

「そんなもんか？ 魔術がバレれば人体実験になるとか、そういう奴じゃないのか？」

「霊能力番組の霊能者がテレビの前で処刑されるか？」

じゃあ、バレたらオコジョになるとか、と上条が言うと苦笑いしながら、それはちよつと違う、とタイムが返した。

フルールが言うには、
魔術に人種、階級などの縛りは無い。生命力さえあれば、だれにでも使える。

誰でも使える割に一般に普及していないのは、社会への影響等を考えてのことではなく、単純に敵対する魔術師に対し情報を秘匿する必要があるのである。つまり軍事機密のようなものだそうだ。
逆に言うと魔術の存在そのものを隠蔽する気はあまり無い。

「魔術がバレて袋叩きされるって認識は、魔女狩りが要因だろうね」
軽い魔術のうんちくを言う姿が、インデックスと重なった。
適当に相槌を打っていると、フルールが神妙な面持ちで訊ねてくる。

「私からも前々から聞きたかった事がある。……君の力は何だ？」
恐らく右手の事を聞いているのだろう。

……そういえば教会の設備（魔術的な）をいくつかぶっ壊した記憶がある。

どんな異能を打ち消す力。自分ですら未だによくわかっていない力。

「俺にもわかってることは少ねえんだけど、俺の右手には幻想殺しイマジンプレイカーって能力が備わってたんだ。その所為でこの前色々壊しちゃったみたいだな」

「イマジンプレイカー
幻想殺し……、」

若干目を見開いて上条を見る。正確には上条の右手を凝視していた。

「読んで字の如く、どんな異能の力も、神の奇跡だって打ち消しちゃう、さらには私上条わたくしさんの幸運ラックさえ吹っ飛ばすとても便利な代物でせう」

「ふん。どうでもいいけど」

「どうでもいいんかい！ と往来で叫んだ上条は決して悪くないはずだ。」

ふと思いついた。

自分は金を稼ぐ為に家を出ていた。

しかし、結果は惨敗。面接すら受けることが出来なかった。

今は気分が良い、と魔術師は言っていた。

早くはやてに金を返したいし、今ならこっちの頼みを気前良く聞いてくれるかもしれない。

「頼みがあんだけどさ」

「こちらを振り向かず表情はわからないが、ただ、何だ？ と聞いてきた。」

「少し金貸してくれねえか？」

「無理。こっちはただでさえ日々の暮らしで苦しんでるのにこれ以上削られてたまるか」

即答だった。

そうだよな、と一人納得する上条ははてと疑問付が浮かんだ。

「……………その金どうしたんだ？」

上条の最もな疑問。精神年齢がどれだけ高くとも、姿がこれだ。ちびっ子

唯一収入限でありそうな教会も、寂れ過ぎて周辺住民はあることさえ怪しかったので、おそらく教会としての機能は発揮してないだろう。そういった後ろ盾バトロンがない魔術師が、どうやって金を稼いだのか、かなり気になった。

「……………汚い金じゃない。べつに」

「す、すまん」

「月の始めにモモコさんからもらったし」

「ただの小遣いじゃねえか！」

「ちゃんと自分で稼いだから問題ない！ たまに買い出しの手伝いとかで稼いでいる！」

「世間はそれを『お使い』と呼ぶのでせう！ つか、そんな生活ニートと同じだわ！」

ピシリとティムは固まり、そして、ぎぎぎぎと錆びた動作で振り向いた。

「ニート！？ 私はそんなのじゃない！」

「ぬあつ！？ キレル10代！？」

「誰がキレル10代だ！ 私はこう見えても年を食つてると言っただろうが！ 痴呆症か？ 痴呆症なのか！？ 若者がそんな病にな

るほどだめになってるのか！」

「そんな事ありません！……はあ、でもお前みたいな女の子に体のこと心配されるのって結構良いもんだな」

仕返しとばかりに気障っぽくフルールを褒めてみた。

しかし、

「何を言ってる？ 私は男だ」

かみじょうはこんらんした！

フルールがあっけらんと云ってる事が上手く頭の中で処理できない。

「あ、えっ？ 男？ 何処が？」

「見ての通りだ。どう見ても男だろう？」

見ての通り、と言われても肩辺りまで伸ばした金髪に陶磁器のように白い肌、体の線は丸みを帯びていて、どう見ても男性らしくなく、むしろ女性的だ。

よって、

「ワイワイ上条さんをからかっているんですか？ だったらもつと

マシな冗談言いやがりなさい」

「冗談を言う顔に見えるか？」

「だってこの前、服破いた時」

「待て、それ以上言っな」

圧力のかかった音程を出して上条を黙らせるフルール。あまりの威圧感でそれ以上言えなかったが、フルールの耳元でボソツと呟いた。

「もしかして、性同一性障害って奴か？」
「equities003!」

その日の海鳴市では、私服の高校生が巨大な槍を持った子供に追いかけられる光景が見られたそうだ。

「お帰りなさい、ってどないしたん？」
「……何でもねえです」

ひどく疲れた表情で帰って来た上条に狼狽するはやて。

上条が帰って来たのは一番星どころか千番星が上がりきったお星様満点の空が映える時刻でございました。

「夕飯出来とりますよ。今日はコロッケや」
「アイツの妨害が無けりゃ一緒に作れたんだけどな……」
「ふえっ？ それってつまり」
「ゴメンな、不自由なのに無理させちまって」
「………当麻さんのバカ……」

食事中にはやてが上条に口を開く事はなく、あっという間に時は過ぎてゆく。

「………お米があらへん」

あれから口を利かなかつたはやてがいきなり話しかけてきた時、上条は求人案内を漁っていた。どうにか身分証明書が必要ないバイトを探していたが、行き詰って首を捻っていた所だ。

「別にパンでも良いぜ」

「パンもあらへん」

「？ …… 主食無しで大丈夫だろ」

「材料もあらへんよ」

「…………… ハアツ!？」

ガタンつと立ち上がりはやてを見つめた。彼女の目は普段の和やかな物ではなく、何時になく真剣なものだった。

はやて曰く、『なんか物音がして廊下見に行つたら、冷蔵庫が荒らされとつてな、ネズミかな？』と想着、箒もつて家中探しとつたらお米も荒らされとつて、今ウチには醤油と塩しかない』との事。

冷蔵庫を開けるネズミが何処に居よう。

一瞬、上条の頭にネズミの着ぐるみを着たインデックスが浮かび上がる。 …… 食い物の為に平気で人んちに入つてきそうで意外と怖い。

「…………… しょうがねえな」

おもむろ
徐に玄関へ歩を進める。

はやては怪訝な顔で、

「どうするんです？」

「今から買いに行くしかねえだろ」

「うーん……………、コンビニ弁当つて栄養価低いけどな……………。しゃあないな。あたしも着いて行ってええですか？」

ああ、良いぞ。と二つ返事で了承した。それを聞いたはやては嬉しそうに出かける仕度を始めた。最近は上条と一緒にいるだけでも嬉しいらしい。当の本人は全くその好意に気づいてはいないが。

これが運命タニンゲポイントの分かれ道だった。

もうすでに世界を照らす光は電灯と月明かりのみになっていた。

「っ」

「どうした？」

突如はやての顔が歪み、上条は心配して声をかけた。はやては大丈夫、と言っていたが、どうも様子がおかしい感じに首をかしげる。対して、はやては上条に心配かけまいと話題をそらす事にした。

「結構種類あつたんですね」

「うん。俺がいた所とほとんど変わらなかったな。あつちもつと種類が多かつたけど」

「へー、どんなんあつたんです？」

「地獄ラザニアとかイナゴのバター焼きとか」

あまりのネーミングに目を白黒させる。学園都市の試作料理は外の住人には理解できない物ばかりだから当然だろう。

(……ここで切り出すか)

フルールと言い張り合っていた最中、ふと思いついたのだ。

自分が学園都市に帰れば、はやてはまた一人になってしまう。

上条はたまたまここに飛ばされただけ、詰まる所『神隠し』に遭つてるわけであり、二度とこれない可能性が高い。それじゃあ、はやてがあまりにも不憫すぎる。

そこであの小動物の事を思い出した。

あの小動物を引き取れば良いんじゃないか？

あの少女達は小動物の事をとて心配していて、動物病院まで届けに行つたのも彼女達。その後、誰の家で引き取るか話し合つていたのを偶然耳にしたのだ。

もしもはやてが小動物を引き取つたら、そして彼女達がたまに小動物の様子を見に来てくれれば。

そんな考えが浮かんだ。

一方的に押し付けていると自覚している。

そんなに上手くいかないとわかっている。

だけど、誰が何と言おうと、はやてを悲しませたくない。

上条当麻は意を決して口を開き

「え？」

視界のほんの端っこに人影が写つた。夜遅くても人ぐらいは通るので、普通なら気にも留めないだろう。

そう普通なら。

その影の輪郭に見覚えがあつたから。

「あいつ……」

栗色のツインテール。黄色いパーカーにオレンジのスカートが闇夜に映えるはやてと同じぐらいの年齢の少女。

彼女の姿を見て浮かんだ感想。

あまりにも不自然だ。

塾に行っていたのなら、この時間に外に出てもなんとも思わない。が、夕方、彼女達はたしか、塾に行っていたのではないか？それに、何故彼女は鞆の類の物を持っていない？

「当麻さん？ あの子がどないしたんですか？」

車椅子から上条のかおを覗き込むように表情を窺^{うかが}うはやて

上条の表情を読み取って、ただ事ではない事を察したようだ。

「……はやて。荷物持ってきてくれ」

「へっ？ うひゃ！？」

上条の経験が告げる。

彼女を見失うなど。

はやてが座っている車椅子のハンドルを握り、軽快に走り出した。……とても失礼な事だが、はやての体重が軽いため、上条の走りにそれほど支障は出なかった。

彼女がコーナーを曲がりきって少しした時、異変は起きた。

世界が変わる。

何処か隔離された感覚になったが、上条は走り続ける。

そして、上条がコーナーを曲がった瞬間、巨大な何かがぶつかった音と、木材が折れたような音が不思議な空間に響いた。

音源へ向かうと、折れた樹木とそれに埋もれた毛玉のような生物、それに栗色のツインテールの少女と夕方に拾った小動物がいた。

冷静になって辺りを見れば、ここは小動物を預けた動物病院じゃないか。

「一体何なんだ！」

思わず叱咤するが、状況は変わらない。

上条の叱咤の声にようやく少女がこちらに気付いたらしく、とても驚いた表情になっている。

「グオオオオオ……！」

ムクリと起き上がった毛玉の生物^{ばけもの}。赤い目玉が爛々と輝き、頭から突き出した2本の触手が怪しく蠢いていた。

見れば見るほど負の感情を植えつけられるような、恐怖を抱かせる姿。

しばしその姿に見入られていた時、少女に抱えられていた小動物が突然口を開いた。

「来て……くれたの？」

10代前半の高い少年の声だった。

「……喋った!?」「」

小動物を抱えている少女は慌てふためき、はやては啞然と小動物を見つめ、上条は冷静になろうと逆にパニックに陥った。

(どういうことだよ!? あいつは魔術が無いって言ってたはずだ!
! どう見てもあのバケモンと狸は魔術関係だぞ!)

「っ! 来るぞ!」

小動物が喋った事に驚いていたうちに、怪物は次の突進を放とうとグツと構え、

「グオオオオオ!!!」

ズゴツ！ と地面を踏み抜き、高く跳躍した。
狙いは少女と抱えられた小動物。
少女は足がすくんで立ち上がれず、ただ怪物を眺めていた。

「こん……のツ！」

押し潰されるのをただ眺める上条じゃない。怪物が飛び上がった直後に座り込んだ少女のもとに向かって走りだしていた。
腕を掴み力づくで引っ張って怪物の着地点から外させる。ドゴン！ という音と共に大地に大きな振動を与えた。

「だ、大丈夫ですか！？」

「当麻さんッ！」

少女二人の悲痛な叫びが重なった。
砂煙が晴れると上条の姿が露わになり、二人はホッと息を吐いた。

「ここから逃げる！ 早くっ！」

いち速く反応した栗色ツインテールの少女ははやてに小動物を預け、ハンドルを握ってまた走り出す。

そして、怪物の目玉と目玉の間に右手をイマジンプレイカー一発入れ、対して効果が無い事に舌打ちし上条も続くように彼女達を追った。

第一章 2 (後書き)

第一章 3 (前書き)

あー今回は長かったです。

身勝手ですが、オリキャラの名前を変更しました。

第一章 3

少女達は走った。

暗闇を照らすものは電灯だけになった夜道を何かから逃げるように、栗色ツインテールの少女が、車椅子の少女を押し走っていた。しかし、栗色ツインテールの少女、高町なのはには荷が重かったのだろう、どんどん速度が落ちてきた。

「もうええよ。あとは自分でしますから」

車椅子でフェレットを膝に抱えるはやてが申し訳なさそうに言った。なのはは疲れているのか無言で首を横にふり、それを断った。

その時、ガクンっ！ となのはの体が崩れ落ちかける。疲れが足にキタのだろう。

地面にはぶつからなかったが。

「っと、全然大丈夫じゃねえじゃんかよ」

崩れた瞬間に自分より背の高い男に支えられたからだ。

支えられた手の温かみを感じとって、救い出されたヒロインのような感覚に陥った。顔を上げれば見覚えのある男性の顔。

名前は上条当麻だったか。

「ごっついまっくろくろすけみたいなんが襲ってきた!?」

「おい狸！ あれの事、キチンと話してもらおうからな！」

「狸じゃなくてフェレットです！」

この言葉の押収の間にも走っているからさすがと言える。はやて、はやての腕の中にいるフェレットが話し出す。

「君達には、資質がある……お願い、僕に少しだけ……力を貸して！」
「資質ー？」

フェレットはなのはたはやてを見つめてそう言った。
ただ単に『資質』と言われてもパツとしない。

自分は『平凡な小学3年生』なのだから。
はやても同じようだ。

自分は『車椅子に座っている以外普通の9歳』なのだから。
上条は違った。彼は科学サイドの総本山、学園都市に住んでいる
為、フェレットの言う事は多少なりに理解できる。彼女達はなにか
しらの能力の『原石』だと予想した。

「僕は、ある探し物の為に、ここではない世界からやってきました」
「違う世界って……」

自分と同じ状況なのか？ フルールの言い分は期待できないな。
と心の中で思う。

「だけど、僕一人の力では想いを遂げられないかもしれない……だから、迷惑だとは分かっているのですが、資質を持った人に協力してほしくて……！」

フェレットの顔は変わらないが、その言葉は事の重大さが伝わってくる。

「お礼はします、必ずします！ 僕の持つてる力を、貴女に使って欲しいんです！ 僕の力を……『魔法』の力を！」

「『魔法』……？」

なのはとはやては首を傾げて呆気にとられた表情になる。

いきなり魔法と言われてもそんな突拍子も無い話は信じられるわけが無い……、

「（魔法って、この子もフルール君みたいな魔法使いなのかな？）」

「（当麻さんは空から落ちてきたって言ってたから、それと関係あるのかな？）」

…… 以外にも、この二人は非現実的ファンタジーなものが身近にあるため、すんなりと受け入れることが出来た。

（……あいつの言う事、全く信用ならねえ。魔術が無いって言ったくせに）

ここにはいない魔術師の黒い笑顔が浮かぶ。恐らく聞いても『魔術は無いって言ったけど魔法は無いとは言っていない』とか言われればぐらかされるのがオチだ。

上条の経験上、あーいう人種はまだなにか隠している事が多い。主に土御門とか、陰陽術師とか、シスコン軍曹とか。

3人が至高に嵌っている時、上空から闇夜に紛れて黒い塊が飛来してくる。そして、その黒い塊はなのは達の後方にクレーターを作って着陸した。

凄まじい音と共に砂煙が立ちこめ、敵味方関係なく視界を奪った。そして、

「うおおおおおおおおおおおおおっ！！」

もうもうと立ち込める砂煙を掻き分け飛び出した人間がいた。

上条当麻だ。

上条は拳を握り締め、怪物に叩き込む。

一方なのは達は、怪物が落ちてきた衝撃で軽く吹き飛ばされた。特に、はやては車椅子からフェレットをかばうように落ちてしまいい、気絶した。それを見たなのは悪いと思いつながらも、はやてを引き摺って電柱の影に隠れる。
ふと、冷静に辺りを見回すと、1人少ない事に気付く。

「うおおおおおおおおおおおっ！！！」

突然の咆哮にビクリと肩を震わせ、何事かと電柱から覗き見た。砂煙でよく見えないが、誰かが黒い塊に立ち向かっている。

「凄い……あれと素手で渡り合うなんて……！」

フェレットは純粹に彼の力の異端さに驚き、なのは彼の立ち向かう心の強さを感じ取った。

しかし、彼らの驚きは次の瞬間無くなった。
重量のある物質が、軟らかい物に当たる音が夜の海鳴市に響く。
なのはとフェレットは思わず息を呑んだ。

一瞬の攻防にも終わりが見えた。
怪物は回転しながらの体当たりを繰り返して、辺りを跳ね回るといいて、上条はその台風の目の中に留まって、右手でいなしていくだけだ。

怪物が右手に当たっても手ごたえを感じない。この怪物は魔法と
いう異能の力で形作られているはずだ。イマジンプレイカー 幻想殺しなら消せるはずだ。

「イマジンフレイカー俺の力じゃ役不足ってことか!？」

いや、違う。

怪物を形作る魔力が強すぎて打ち消しても直ぐに再生しているだけ。素人の目には変わらなく見えても怪物は衰弱していく。

その証拠に段々と怪物のスピードが下がっている。

バウンドする怪物はまた高く飛び上がり上条を押し潰さんとする。真上に構えた上条の右手に相当の重量が圧しかかった。怪物はすぐにバウンドして離れていく。

ふう、と息を整え、また怪物に向き直ると、

左足を思いつき引き摺られ、コンクリの塀にぶつかった。

コンクリで出来た塀はぶつかった衝撃に負け、上条を巻き込んで崩れ落ちる。

それを見たのははショックを隠せないでいた。

見ていたのはなのはだけじゃなかった。いつの間にか目が覚めていたはやても、その光景を目の当たりにしていた。

「そんな……」

「やっぱりダメだったんだ……。僕の所為で……!」

フェレットが後悔の言を呟いたが状況が変わることは無い。

唯一戦ってくれた人は起き上がらない。怪物は未だに唸っている。呆然としているはやてをなのは1人では連れて逃げる事もできないし、逃げたら上条はどうなるのか？

絶対的な状況。

覆す方法は、一つだけある。

平凡な小学3年生、高町なのはは決心した。

「……フェレットさん」

不意に声を掛けられたフェレットは多少驚きながら、優しい声調でどうしたの？ と問い掛ける。

「……お願いします。皆を守る力を貸してください！」
「っ ……わかりました。これを！」

そう言って首についた赤い玉をなのはに差し出す。
赤い玉を手にしたなのはは、

「温かい……」

冷たいはずの宝石に、確かに温かさを感じた。ちょうど上条に抱え上げられた時を同じような温かさ。

「それを手に、目を閉じて、心を澄ませて……僕の言っ通りに繰り返して」

フェレットの丁寧な説明に、なのはは無言で頷き答える。

「いい？ ……いくよ！」

「我、使命を受けし者なり」

「『我、使命を受けし者なり』」

「契約の元、その力を解き放て」

「えっと……『契約の元、その力を解き放て』」

「風は空に、星は天に」

「『風は空に、星は天に』」

混乱している。

そんな一時もつかの間、桃色の光に身じろいでいたあの怪物が唸りながら突進を仕掛けてくる。

「危ない！」

電柱の影からはやてが叫ぶ。気付いたなのは小さく悲鳴をあげ、手に持った杖を前に突き出した。

『Protection』

なのは持つ杖から女性の高い声上がり、ベシヤリっという気持ち悪い音が聞こえた。

突進した怪物が壁で遮られるように、なのはの前で止まっている。次に回転が加わりガリガリガリッ！と遮る壁を削ろうとするが、それは怪物自身の体を飛び散らせるだけに終わった。やがて怪物は形を無くし、ヘドロのように辺りを汚した。そして、飛び散ったヘドロは散弾のように辺りを壊し始める。

弾丸の射程目標は、はやても含まれている。が、弾丸がはやてに当たる事はない。

異能が悲鳴をあげる音に伴い、弾丸が消滅する。

「あ………」

ヒーローのように颯爽と助けてくれた。己が傷つきながらも立って来てくれた。

上条当麻が無事でいてくれた。

「大丈夫かはやて？」

「え、あ、はい。大丈夫や……」

思考がどっかに飛んでボーっとしているはやてに声をかける上条。上条の問いかけにはやては未だに意識が飛んでいるが、なんとなく首を縦に振った。

怪物の破片は、形容し難い音を奏でて元の姿に戻ろうとする。それを見たなのはも上条も驚きを隠せない。

「あれは忌まわしい力によって生み出された思念体、あれを停止させるには、その杖で封印して、元の姿に戻さないといけない！」

「……手立てはあるんだな？」

はい！ とフェレットは首を縦に振る。

続けて上条は聞く。

「それは俺じゃダメなんだよな」

「ええ……。今の所、彼女しか……」

ちらりとなのはを一瞥するフェレット。

さっきの光景を思い返せば、『魔法』というものの知識が無い上条でも彼女の潜在能力は凄まじい事はわかる。

ふと、なのはを見ると、少し怯えてるように見える。

それも無理は無いか、と上条は思った。小学生でこんな事に巻き込まれ、尚且つ死が直面している状況なんて耐えられるはずも無い。

しかし、

「あの、やります！ 私がやらなきゃフェレットさんにも皆にも迷惑をかけちゃうから……！」

そんなのただの強がりだ。声も震えているし、何よりその瞳には

不安の色が全く隠せていない。それと同時に、彼女の背中は何も背負っているような錯覚に陥るほど重たい霧囂気を出していた。

そんなのは見て、上条は口を開く。極めて優しい言葉を。

「そっか。それじゃ安心だ」

「ふえ？」

「だって俺の出来ない事をしてくれるんだろ？ 安心する理由なんてそれっぽっちで充分だ」

「けど」

「高町、だったか？ 高町は出来る事をやればいい。その代わりに俺が全力で高町をサポートしてやるよ」

なのはは無言且つ、真剣に上条の言葉を聞いた。

「誰かが言ってたんだけどな、『人は1人じゃ何一つ出来ない。だから群れて生きるんだ』って。俺が出来ない事は高町がやればいい。高町が出来ない事は俺がやればいい。ま、あのフェレットはやってもいるんだ。俺達に出来ない事は、無い」

「あ、」

ここでなのはは気付いた。

これは自分の責務じゃない。無理だったら自分は逃げても良かった。でも、自分しか出来ないと言われた時、これは自分がやらなければならない事だと、頭によぎったのでは？
でも違う。

これはなのは1人で行ってる事じゃない。この場にいる全員が行っていることだ。

フェレットは少し照れ臭そうに前足で頭を掻く。

はやてはそうだと言わんばかりに微笑んでいる。

これ以上心強いものは無い。

「高町が背負おうとしてるかなんて俺にはわからない。けどこれは言っておく。そんなに不安を拭えないのなら、」

一旦言葉を切り、右手の平を見せるように突き出した。

「まずはお前の背負うものをぶち壊してやるよ」

なのはは目を閉じた。

怪物はすっかり再生している。

唸り声を上げて突進してくるが遮られる。上条の右手によって。

フレットの言うには自分の呪文を見つければいいと。

程なくして、自分だけの呪文を見つけた。

「『リリカル、マジカル……』」

目を開く。その瞳には迷いは無い。

「封印すべきは、忌まわしき器『ジュエルシード』！」

「『ジュエルシードを、封印!!』」

『Sealing mode・Set up』

強烈な閃光。また視界が桃色一色に染まる。

でも確かに見えた。怪物の額にローマ数字が浮かび上がる所を。

封印というのだから、自分がいると邪魔になるのだろう。足早に

怪物から退却する上条。

杖から白い帯状の魔力が怪物を包み込み、そしてしゅるしゅると怪物の身体が分解され、消えてゆく。

「「「「……「「「」」」」」」

誰も口を開かない。

辺りには夜本来の静けさに戻った。

「……早く、杖あの宝石に触れて」

「あ……うん」

怪物がいた場所のアスファルトは砕けており、その中に一際輝くものがある。

(あれが元凶……)

青く輝く親指大の大きさの宝石。

なのはが杖を突き出して、杖の先端部分である赤い宝石が触れると、スツと青い宝石に吸い込まれていった。

『sealing』

「ふう…封印完了」

女性のような電子音がこの場にいる全員をホッと息をつかせ、

「……ってどうなるんコレ？」

彼らが戦った場所は悲惨な事になっている。

電柱は折れ、塀は崩れ落ち、アスファルトなんかは地割れの後のよう。

「も、もしかしたら、私達、ここにいと大変あれなのでは……」

フェレットがしばし考え込む。そして、

「……逃げた方が良いと思います」
「そんなフリだと思ったよコンチクショウが！」

現実とは無常である。あれだけ騒いでも野次馬さえ出てこなかったのに、今になって遠くからパトカーのサイレンの音や何事かと周囲の民家から話し声が聞こえてきた。

手始めに車椅子を失い移動手段が無いはやてを背負い、次にあわあわつろたえるなのはの手を掴むと、

ビリー！ と、

なんか、布製の何かをやぶる音が聞こえた。

音のするほうを見たら、呆気に取られるあどけない少女の顔。

そして、目線を下げると一糸曇りも無いハダ色。一瞬で先ほどの黄色いパーカーに変わった。

視線を戻すと、やってしもうたなあという表情の中に得体の知れない黒い感情が見え隠れしてるようなしてないようなはやての顔。

火山が噴火する前のように、時限爆弾のカウントが10をきったように、少女の表情も段々赤みを帯びていき、

「ぎゃ

」

「不幸おおだあああああああああああああああああああ！

！」

少女と声を被せる事で、彼は変質者に成らないで済んだ……はずだ。

「打ち身、打撲、擦り傷、その他もろもろ……本当に何をしたのかしら？」

八神はやての主治医、石田幸恵は不思議そうに呟いた。

何故いきなり街中から病院へ描写が移ったのかというと、

上条はなのは達を掴んで逃走 逃げ切った所で戦いの怪我、および疲れによってダウン なのはとはやてがケータイで石田を呼び出して病院へ 石田の献身的な治療により包帯で縛られた。

という感じだ。

「表面上はこんなに傷だらけなのに、骨は異常が見当たらないなんて……。ま、これぐらいなら直ぐに帰っても支障は無いわ」

「そうですか……ありがとうございます」

素直に礼を言った。これからこの人の世話になる事が多くなりそうだと直感的に思う上条だった。

待合室まで来てくれた石田はそれじゃあ、と言って白衣を反す。

そういえばはやての事よろしくって言われてたなあ。あんまり石田先生に迷惑かけないように気をつけよ、と心に決めた上条は、深夜に近いため人気ひといけがなくなった待合室から出口へ向かった。そこであんまり会いたくない人物に出会った。

「こんばんわ」

「……子供は寝る時間だぞ普通。って、そんななりでも俺より年上なんだっけ？」

「う……、あまり触れないで欲しい。屈辱だ」

渋い顔をして上条を睨む魔術師フルール。黄金色の髪も赤と桃の双眸も夕方と変わらずにそこにあった。ただ、服装は夕方の制服姿ではなく、

グレーのタイツに似たものを着て、腰からつま先までスカートのように鋼鉄製の鎧を広げている。

これが魔術師の戦闘姿。

「ふふふつ、見惚れたか？」

「いや全然。フーか思いつきり変だぞそれ」

「冗談っぽく鎧を見せ付けるがぱつぱつと切り伏せられた。フンツ

！と胸を張っているが、目に見えて肩が下がっている。

次の瞬間、イタズラっぽい表情は無くなり、真っ直ぐと上条を見つめた。

「こつちとしても気になる事が多い。話してくれるかな正直に」

「魔法の事だな」

「その通り」

ニヤリと笑みを作るフルール。

特に隠す事もないので洗いざらい吐く事にした。なのはが買ひ物帰りになのはとであった事。そこで異世界人が怪物に襲われているところを助けた事。異世界人がなのはに『魔法』の力を与え、怪物を倒した事。そして上条がここにいる理由。

全て聞き終わった後、

「馬鹿か君は」

かなり哀れなものを見るような目で言い放った。

「……此度の事は礼を言う。君がいなかったら、八神と言う子もあの子も危なかった。自分の身も省みず、あの子達を守ってくれたんだろう？ そのフェレットの言う、探し物も壊さないように気をつ

けて。 いつか借りは返してやる」

急にしおらしくなり、頭を下げた。

目付きも『馬鹿か』と言った時とは打って変わり、誠意がしつかりと見られた。突然の代わり映えに戸惑いを隠せない上条は始終何も言えなかった。

「……別に礼なんていらねえよ。皆無事でいられたんだ」

「しかしだな、大義を尽くした者にそれ相当の報いがあっても良いだろう」

「大義って……俺はただあいつの手助けをしたただけだぜ。一番頑張ったのは高町だ」

フルールはなお食い下がろうとするも、上条は断り続け、釈然としないまま引き下がった。

(ここまで欲が無い人間はこいつとあの人たちぐらいだろうな)

ま、借りは返すからね勝手に（いじわるに）
心内での怪物も真っ青な真っ黒い笑みを作ったフルール。

その瞬間、上条に得体の知れない寒気が襲ったと追記しておく。

病院の中庭。

新しい車椅子に乗った少女と、フェレットを膝に抱えた栗色ツインテールの少女が、二人と一匹で話し合っていた。主に内容は自己紹介や魔法について、そして、フェレットの謝罪だ。

しかし、二人の少女達は不思議な事にはすでに片足を突っ込んでいる為、そんな事気にしていないとやんわり言い返した。

話題が尽きて、しばし黙り込む二人と一匹。

「あの……なのはちゃん？」

話を切り出したのははやて。

「お願いがあるんやけど……」

「何かな？」

「ええと……、その……」

切り出したのは良いが、言い出す勇気が出ない。もし断られたらどうしよう。もし彼女が言わなくても迷惑がられたらどうしよう。

でも、さっきの光景を思い出す。

あんな怪物に1人で挑んだ人の勇気。

自分に渦巻く不安に打ち勝った人の勇気。

今度は自分が勇気を出す番だ。

「あ、あたしと、あたしと友達になってください！」

緊張の為、所々噛みはしたが言い切った。
しばしの沈黙。はやてにまた不安が募る。

「何を言ってるのかな？」

少し笑い声が漏れる少女の返事。

一瞬、呼吸が止まりそうになった。

「もう私達は友達だよ？」

「え？」

「はやてちゃんは私のことを名前で呼んでくれた。だから、もう私

達は友達なんだよ」「

顔を上げると、そこには満面の笑顔ではやてを見つめるなのがいる。

気付けば、目じりに水滴が溜まっていた。気付けば遠くに上条の姿があった。

孤独だった少女は、なのはに答えるように満面の笑みを浮かべた。

「なのはちゃん！　これからよろしくな！」

「うん！」

第一章 3 (後書き)

フルールの戦闘服はFATEのランサーを意識しました。
ちやっかり二人ほどフラグを立てたっぽいですね。

この作品では石田先生にお世話になりそうです。

感想指摘ここが良いここが悪いなどの返事を待っています

行間（前書き）

これは、とある魔術師の短い記憶

行間

しとしとと雨が降る大地。周りには誰もいない。

立った二人を除いて、だ。1人は背が高く、筋肉質で屈強な武人。整った顔立ちで、白髪交じりの金髪が特徴的だ。もう1人は対照的に、背が低く、中性的で優しい印象を受ける、線の細い華奢な青年。混じりつけの無い金髪を風に揺らす。

今の彼らの構図を説明しよう。

屈強な武人は膝を突き、華奢な青年を抱えている。

その華奢な青年の胸には槍頭と柄が3：2の長さ騎乗槍ランスが突き刺さっていた。

屈強な男はただただ華奢な男を抱きかかえ、空虚で生気の無い目で彼を見つめていた。涙も流さず、無言で見つめ続けている。

彼らは親友同士だった。そして、互いが認める好敵手だった。

物言わぬ友の骸むくろを抱き抱え、屈強な男はおぼつかない足取りで、何処かへと消えていった。

第二章 魔法少女 Lyrical Magicial (前書き)

本当に、本当に、身勝手ながら改正をして申しわけありませんでした。

1〜8話まで改正したので急に話が突飛して混乱してしまうかもしれません。

魔術師の名前も改正、というか変更しました。

本当に申しわけありませんでした

第二章 魔法少女 Lyrical magical

深夜と言う事もあり、上条達はなのはを家まで送って行った訳なのだが……、

「貴様、なのはに何をした!？」

一緒にいたはやてに目も暮れず、というよりなのはと上条そのそばにいるせいしか目に入らなかつたらしい。さらに都合の悪い事、上条に掴みかかり視線だけで人を殺せそうな人物は、退院した日に迷惑かけた大和撫子の恋人らしき人ではなかつたか？

上条の顔がだんだんと青くなるのを見たなのはが仲裁するまで高町なのはの兄、高町恭矢たかまちきょうやは手を離さなかつた。

「いやあ、悪かつたね、ウチのなのはが世話をかけたようで。でも誤解はしないで欲しい。恭矢にも悪気が無かつたんだ。恭矢はこう見えて妹想いでね、君と一緒に帰ってきた時に思わず早とちりしてしまつたようだ。本当にすまないね」

そう言っているのは高町士郎たかまちしろう。なのはと恭矢の父親らしい。

とは言うものの、彼の後ろから放たれる突き刺すような何かの所為で上条はずっと肝が冷えた状態だつた。

「おっと、もうこんな時間か。これ以上遅くなると親御さんが心配するだろうからな、車で送ろうか」

「いえ良いです。これ以上迷惑かけたくないですし、ちょっと忘れもんもあるんで……」

申し訳なく思いながらやんわり断ると、士郎はそうか、とだけ言つて、結局玄関まで見送ってもらつたりとここの町の人たちは本当

に親切だなあ、と心に沁みる上条だった。

「なんだか、とてつもなく長かったな」

とにかく疲れ切った上条は自然にそんな言葉を漏らす。

忘れ物といつても、先ほどの出来事で大破した車椅子に乗せていた明日の朝食を買い直しにまたコンビニへ向かっただけだ。余談だが、深夜であつてか、経済的に優しい価格で売られていた。

「……なあ、当麻さん」

「ん？ どうした？ はやて？ 他に何か買うもんとかあつたか？」

唐突に口を開くはやてに対し、上条は軽く返事を返した。

「ちゃうよ。 当麻さんって、何者なん？」

しかし、はやての発した言葉に上条の足が止まった。

「あの時の当麻さん、怪物を素手で殴つとつたし、なのはちゃんの服も破つとつたやん？ それにウチを庇つた時見えとつたんよ。怪物の破片が手に当たつた途端、破片が消えたところ」

「っ……それは」

上条は誤魔化そうと口を入れようとした。だが、はやてはそれを遮るよつに言葉をつむぐ。

「もしかしたら、当麻さんはユーノ君みたいな魔法使いやないかなあつて思うたんけど、魔法知らんかったようなりアクションしとつ

たから……。当麻さんって、何者なん？」

結局はやての推理に口出しできず仕舞いだ。

はやては聡い子供だ。なのはとユーノと一緒にいた時に言い出さなかったのは、きつとユーノに怪しまれないように注意したのだからか。

上条はため息を吐く。異世界じぶんのこから来た事を言うのはかなり気が引けたから。

再び歩き出し、上条はぽつりぽつりと自分の状況を説明した。

学園都市と呼ばれる、超能力を開発する街から来た事。

その街はこの世界には無くて、別の世界にあり、自分は何らかの拍子にこの世界に来てしまった事。

あらゆる異能げんそくを打ち消す力を持つ事。

そして、いつか学園都市に帰らなければならない事。

それを聞いたはやての反応は、

「ふん、そうなんや」

そんなものだった。

「あんまり驚かねえんだな」

「今日色々ありすぎた所為や。驚く元気がもう無いし、それに」

目を伏せて、何かを吹っ切った調子ではやてが言った。

「当麻さんと出会った時もアレやったからなあ。心の中で、いつかそうなるて思っつとった」

「はやて……」

「夢はただの夢。シンデレラみたいに魔法まほうもいつかは終わりや」

「……、」

はやてははにかんでそう言った。

今、はやてにかけてやる言葉を上条は見つけられなかった。

ただ、どうしても何か声をかけてあげたかった。

すると、急に手首に重みを感じた。見てみるとはやてが上条の手首を掴んでいて、顔を俯かせている。

「 当麻さん」

「……？」

「一生のお願いや。……当麻さんが、いつか変える日まで、一緒にいて欲しい……！」

はやての搾り出すような声に、上条は震えたはやての手を握る事しかできなかった。

第二章 魔法少女 Lyrical Magical (後書き)

.....ウチの上条さんはかなりのへ
たれっぽいです。何故？

第二章 1 (前書き)

うあー

やっととことと書き終えたー

第二章 1

フルールは朝が早い割には遅刻の常連である。というのも、この精神年齢で学校に行く事に疑問を感じて行く事を渋る傾向があるし、学校までの距離が遠いので行く気が失せるのもある。バスで通えば良いと言われそうだが、フルールは万年金欠魔術師だ。

なので、毎日屋根を渡って学校に行っている。

……直線距離が短縮されるから、というのは本人の弁。今日もいつものように屋根から屋根へ跳び、

「
！」

どうやら、今日はいつもより早く起きたらしい。ふと横を見ると、なのはとアリサとすずかが乗ったバスが走っていた。

フルールはバスと並走するように屋根と屋根を飛び超えてゆく。なんとなく、ナノ八たちが気付くかな？ と面白半分にバスに向かって手を振ってみた。当然気づく事は無い。

並走してバスに注意が行っていた。それが運のツキだったのだろうか。

何年も整備されていない廃屋の屋根に移った時、ズボツ！ という音がフルールの足元から鳴り、ズガガツ！！ と誰もいない筈の廃屋から響いた。

因みにバスに乗っていたなのはは、視界の端に何かが落ちたのを捕らえたが、それが何かは認識できずに首を捻っていた。

その日の聖祥大附属小学校では、生傷と埃だらけになって遅刻してきた生徒が、生活指導の教師を大層驚かせたそうだ。

『ジュエルシードは僕らの世界の古代遺産なんだ』

朝、ユーノから教えてもらった魔法、『念話』を使って家にいるユーノと会話をしている。

『本来は、手にした者の願いを叶える魔法の石なんだけど……力の発現が不安定で、昨夜みたいに単体で暴走して使用者を求めて周囲に危害を加える可能性もあるし、たまたま見つけた人や動物が間違っ使用してしまっって、それを取り込んで暴走してしまう事もある』

昨日の怪物が街を壊す光景が脳裏に浮かぶ。そして、ある疑問が出て来た。

『そんな危ない物が、何でウチのご近所に？』

『……僕の所為なんだ』

ユーノは落ち込んだ時のトーンで語る。

『僕は故郷で遺跡発掘の仕事をしているんだ。そしてある日古い遺跡の中であれを発見して、調査団に依頼して保管してもらったんだけど、運んでいた時空艦船が事故か何らかの人為的災害に遭っってしまったって、21個のジュエルシードがこの世界に散らばってしまった、今まで見つけられたのはまだ、たったの2つなんです』

『じゃあ、あと19個か』

授業終了の鐘が鳴り、皆が起立し担当の先生に挨拶をする。それでも念話は続いているが。

『……ちよつと待って。話を聞くかぎり、ジュエルシードが散らばったのは、別にユーノ君の所為じゃないんじゃない？』

『だけど、あれを見つけたのは僕だから。全部見つけて、あるべき場所に返さないと、駄目だから』

正直に言うと、なのははユーノの責任感の強さに驚いた。自分と同じ年で他人の世界まで考えていたなんて。

そんなユーノに、なのはは

『なんとなく、なんとなくだけど、ユーノ君の気持ちわかるかもしれない。真面目なんだね、ユーノ君は……』

『えっ？』

感心したような、優しい言葉にユーノは驚きの声を上げる。

本来なら、責められても良い立場なのに。

『えーと、夕べは巻き込んだじゃって、助けてもらって本当に申し訳なかつたけど。この後、僕の魔力が戻るまでの間。ほんの少しの間……1週間、いや、5日程休ませてほしただけなんだ。それまで』
『戻ったら、どうするの？』

なのはの問いかけにユーノは念話越しにうつ、と息を詰まらせた。

『戻ったら……。また一人でジュエル・シードを探しに出るよ』

『それは、ダメ』

『駄目って』

『私、学校と塾の時間は無理だけど、それ以外の時間なら手伝えるから』

『だけど、昨日みたいな危ないこともあるんだよ？』

昨日みたいに、また怖い思いをするかもしれない。昨日みたいに、他人を巻き込んで傷付けてしまうかもしれない。

それでも、出会ってしまった偶然を、大切にしたいと思う。

高町なのはという人間はそういう人間だ。

『だけど、もう知り合っちゃったし。話も聞いちゃったりしたからほっとけないよ。それに、昨日みたいなことが御近所で度々あったら、皆さんのご迷惑になっちゃうし、ね？ ユーノ君、一人で助けてくれる人もいないんでしょ？ 一人ぼっちは寂しいもん。私にもお手伝いさせて、ね？』

『…………』

『困っている人がいて、助けて上げられる力が自分にあるのなら、そのときは迷っちゃいけないって。これ、うちのお父さんの教え。ユーノ君は困っていて、私はユーノ君を助けてあげられるんだよね？ 魔法の力で』

彼女の意志は固い。

ユーノはそれ以上言えなかった。

『私、ちゃんと魔法使いになれるかどうか自信ないけど』

『なのはは、ちゃんと魔法使いだよ、多分僕なんかよりずっと才能がある』

『そうなの？ 自分ではよく解らないけど、いろいろ教えて？ 私、

頑張るから！』

『うん…………ありがとう』

ユーノとの念話に集中しすぎたのか、いつの間にか夕日が傾いていた。
いつも通りにすずかとアリサとフルールと一緒に帰路へ着くのは。

フルールは帰る道は同じではないが、曰く、1人で帰ると危ないから時間をかけてでも大勢で帰りたいとか。

しかし、3人は彼の本音を知っている。

（（1人で帰るのが寂しいって、素直に言えばいいのに））

精神的に成熟している彼の意地だということは見え見えだった。
3人ともあえてそれを指摘しないのは彼女達なりの優しさだろう。

すずかの家に着いてすずかと別れ、アリサは途中で執事の鰐島さんが車で迎えに来て別れた。

それで、今現在なのはとフルールの二人だけ。

そういえば、

フルールは自分の事を魔法使いと言っていた。

聞き出すなら今、このタイミングだ。

「フルール君」

「ナノハ」

「……………」

こつもタイミングが合ってしまうと、どうにも気まずい気持ちになる。

少しの間見つめ合い、ぷっ、と噴出した。

「あはは、フルール君笑わない」

「ごめん、くく、ナノハだって」

互いの返事に、互いに笑い合った。家族ではないが兄弟さんからの仲の良さだ。

そんな二人の様子を、通行人たちは微笑ましく見ていた。

「じゃあ、私から良い？」

一頻り笑った後、最初に切り出したのはなのはの方だった。フルールは黙ってコクリと頷く。

なのはが口を開いた時、それは起きた。

言葉では言い表しにくい、世界が『ずれた』ような感覚。その変化に気付いたのは、海鳴市の中で3人。

その一人であるなのはは、昨夜の騒動で魔法の存在を知った。

あの時、ユーノが発動した『封時結界』と呼ばれる魔法がちょうどこんな感覚だった。今回みたいに不快な感じでは無かったが。

『ユーノ君？ いまのって』

『新しいジュエル・シードが発動している……すぐ近く！』

『どうすれば！？』

『一緒に向かおう！ あの人を待ってる時間も無いみたいだ！』

『……うん！』

上条の手伝いが無いのは不安があるが、今は仕方ないと割り切る。ユーノとの念話を一旦切り、フルールの制止の声を無視して不快な感覚がする方向へ走り出す。

不快な感覚を頼りに足を動かし、町を駆ける。

一方、一人取り残されたフルールは走っていくのはをボーっと

眺めていた。

何故彼女が急に走り出したのか、詳しくは知らない。

「……………」

彼女の様子を見るに、恐らく昨夜と同じ『魔法』関係。細やかな索敵・探査系の魔術が苦手な為、今の魔力の流れに気付く事が出来なかった。

「ちっ」

靴紐を結ぶような動作で足にルーンをかけ、狭い路地裏に駆け込み、商店の壁を思いつき蹴って反対側の壁に飛ぶ。これを繰り返して壁を駆け登った。

商店の屋根に登ったフルールは、朝と同じくなのはが走っていった方向へ屋根から屋根へ飛び移る。彼女が向かう場所を異様に高い視力で見た。

「……………あのイタチめ……………」

厄介事を……………。

忌々しく呟く。

かつて草原の果てまでを見通した彼の目には、ピンクの髪色の女性が、獣と呼ぶには無理がある異形の怪物に襲われる光景が映っていた。

働かざる者食うべからず。

その言葉の意味をよく理解していた。が、理解するだけじゃ何

の意味も無いという事を今、痛感している。

「……」

上条当麻は八神はやての家に厄介になっている。

生活に困るほど資金が無ければ住む家も無い上条にとって、彼女の家に住むという条件は藁にもすがらないと助からない状況で出された豪華客船だった。

さらに彼女は制服じゃ不便だろうからという理由で私服を買うお金を渡したり、今の上条には衣・食・住全てが整っている。

流石に貰うばかりじゃ悪いから、バイトで資金を稼ぐことにした。……結果は面接に行く前に負けた。

詰まる所。

今の自分の状況とウチにいる居候シスターの状況と鑑みるに、お互いそう変わらない。その事にショックを受けた。

「ここか、身分証明書無しで雇ってくれるって所……」

昨夜の騒動で身体のおちこちが悲鳴を上げ、上条は新たな戦場を見上げる。

午前中にタウンワークで学生OK、怪しくない仕事を探した。

上条は、やっぱり身分証明書無いと無理かなと諦めかけた時、横で見っていたはやてがタウンワークの端っこに見つけたのだ。

駄目元で電話で連絡を取ると、すぐに面接をしても良いと言われた為、すぐさま仕事場へ向かった。

しかし仕事場に着いたは良いが、やはり緊張はするというもの。気持ちは歴戦のバイト戦士、もしくはキング・オブ・アルバイト。

学園都市ではあまりバイトとかした事は無いが。
パンっ！ と自分の頬を叩いて気合いを入れた。
意を決し、上条は新たな戦いに身を投じる。

その戦場の名は、『翠屋』という。

途中でユーノと合流したなのはは石段を登っていく。
鳥居を潜り、『それ』を見た。

骨格が剥き出しで猪よりも二回りほど巨大な黒い体躯。四つんばいのままその奇妙な四つ目でなのはを睨みつける。

「原住生物を取り込んでいる……」

「そうなの？」

「実体がある分、手強くなっている」

雄たけびを上げ、なのは達を威嚇するジュエルシードを取り込んだ獣。

怖い。

「大丈夫」

だが、彼女に退く気は全く無い。

今日、ユーノの探し物を手伝うと言った手前、こんな些細な事でやめるなんて、絶対にイヤだ。

「なのは！ レイジング・ハートの起動を！」

「へ？」

ユーノが呼びかける。すると、なのはは目を丸くして……。

ちよつとだけ、ユーノは冷や汗を流す。

「起動つてなんだっけ？」

予想通りの答えに頭を抱えなくなる。まあ、昨日は皆必死だったからなあ、と結論付けた。

そんな彼女達の漫才をどうとも思っていない獣は雄たけびを上げ、なのはに向かって走り出した。

「我、使命を受けし者なり……で始まる起動の呪文を！」

「え、ええー？ あんな長い覚えていないよう！」

「もう一回言うから、一緒に唱えて！」

泣き言を言うなのはにユーノは必死に詠唱を強要する。

獣が目の前まで迫り、情けなくも恐怖で目を閉じた。

その時、赤い宝石から鼓動を感じる。

《stand by ready set up》

そして、なのはの持っているレイジング・ハート宝石が輝き、ズガガガガガッ！

となのはを巻き込んで石段を破壊する。

本来なら小柄な少女の身体など空くうに放り出されたはずだ。

《protection》

女性のような電子音になる。

立ち込めた砂煙が晴れ、白を基調とした防護服を纏ったなのはと獣の間にピンクの障壁が張られていた。肩から飛び降りたユーノはなのはが無事だった事に安堵の息を漏らす反面、なのはの異常性に驚いた。

魔法を熟知しているユーノから見て、管理外世界の住人である、魔法など微塵も触れた事のないなのはが起動呪文も無しでレイジン

グ・ハートを起動させた事も、ここまで強い防御魔法を使った事も舌を巻く。

当のなのはは、無意識の中で発動させたらしく、自分が無事である事に一瞬きよんとしていたが、すぐにその瞳に強い意志が灯つた。

「レイジング・ハート、お願いね？」

《oil right》

レイジング・ハート
頼もしき相棒を手に、なのはは獣を睨みつける。

覚悟を決めたなのはの突然の変わりように恐れ慄く獣。その自覚の無い恐怖は行動に直結し、その巨体をもう一度ぶつけようとする。なのはは先ほどよりも見えやすい攻撃に冷静に対処できた。

レイジング・ハートを飛び掛る獣に構え、ピンクの障壁を張る。

空中ではいきなりの方向転換が出来ない獣は馬鹿正直に障壁にぶつかり、逆に弾き飛ばされる。

「いたた。ってほど痛くは無いかな。ええと、封印つてのをすればいいんだよね？ レイジングハート、お願いね！」

《all right sealing mode set up》

赤い宝石をつけた機械の杖から出る帯状の魔力が獣を縛り上げる。縛られた獣の額にローマ数字が浮かび上がった。

《stand by ready》

「リリカルマジカル。ジュエルシード、シリアル16。封印！」

雄たけびを上げて苦しくもがく獣。

最後の低坑にと、もう一度なのはに体当たりを仕掛けた。

「！なのは！」

ユーノが叫ぶ。

なのは魔法の発動後のわずかな硬直で反応が遅れた。
そして、

ボウン！ と破裂音が石段に響き、獣はなのはにぶつかる前に吹き飛ばされる。

ユーノは突然目の前で起こった出来事についていけない。

もしかしたら、昨日の高校生がまた助けに来てくれたのかと思っただが、肝心の姿は無く、それに彼の攻撃方法は拳一つだった気がする。

ただ一人、なのはだけは何が起こったのか、誰がやったのかを知っている。顔を上げ、鳥居の上に声をかける。

「ありがとうフルール君」

「どういたしましてナノハ」

にこやかなお礼に不機嫌な返事を返す。

ただならぬ様子になのははうつ、と息を詰まらせる。

「……困った時は頼っても良いってこの前言われたばかりだとは思えない……」

「にやはは……あれ？ 何でその事知ってるの？」

「そして置いてけぼりにされた事が悲しい。すごく」

「そっちの方が本音っばいね」

世間話をする感じで喋りあう小学生二人。

高温の焔に焼かれた獣は弱々しく唸った。獣の様子を見たフルールは鳥居から降りて、顔を顰めて獣に近づく。

「コレが上条当麻アイツが言ってた……」

「わんちゃんがジュエルシールドを間違って取り込んだんだけ。ユーノ君が言ってたよ」

「犬……」

なのはが補足を入れると、ますます顔にシワを寄せた。

封印が再開され、獣が光に包まれると、そこには先ほどの獣とは程遠い小さな仔犬がぐったりと倒れていた。

「怪我しちゃったみたいだね……」

「そうだね……そのイタチ」

「あ、えつと、僕の事？」

「それ以外誰が居る？ 回復系の魔術……魔法は使えるか？」

治してくれ、と倒れたままの仔犬を指差して言った。

慌てて仔犬に駆け寄って回復魔法を仔犬にかける。

正直、ユーノは軽く混乱していた。

魔法がない世界に来た筈なのに、異常なまでの魔力量を持った少女を始め、魔力ごと魔法を消滅させる右手を持つ少年については魔法形態が全く異なる魔導士まで出てきた。

本当にここは管理外世界なのだろうか、と疑いたくなる。

女性が目を覚ましたのは、太陽が西のビル群に遮られるほどの時間になってからだった。

何で自分がこんな所で寝そべっていたのかはわからず、辺りを見回しながら頭に疑問符を浮かべる。そんな時に、トテトテと仔犬が寄って来た。結構遠い所まで散歩に来た所為なのだろう、と結論付けて仔犬を抱き抱え石段を降りる。

たまにはこんな奇妙な日もあるものだ。そう思い彼女は帰路に着く。

女性が去った後になのは達も帰路に着いた。

「つまり、魔術と魔法は全く違う。わかった、イタチ？」

「まあ、大体はわかりました。後、僕はイタチじゃなくてフェレットです」

（でも凄い。まるで神話とか御伽話の世界だ。魔法体系は違うけど、この世界にも魔法はあったんだ）

フルールはユーノに魔術についての講義をしていた。

魔術の成り立ちからあり方まで説明されたユーノはただ嘆息する。

一方、フルールの魔術講義に着いて行けずに、取り残されてしょぼんと暮れていたなのは。魔術の話始めてから2分ぐらいから道行く人を数えて暇を潰していた。

フルールは彼女がそのうちそうなると始めからわかっていた。

簡単に言っと、なのはに置いてけぼりにされた事の軽い復讐の為。なんとも器の小さい人間である。

「ナノハ」

「むっ……」

むくれて頬を膨らまし、呼びかけを無視するなのは。

その様子を見たフルールは、にっこりと笑みを浮かべてなのはの頬をみよ〜んと引つ張る。

「ふ、ふるーるふん？（フ、フルール君？）」

「人から話しかけられたら答える、キチンと。コレ基本」

みよくと頬を引つ張つたまま軽く説教する。本当に器の小さい人間だ。

ユーノや周囲の通行人達は彼女達に微笑ましい視線を送った。

「……ナノハ、これは大事な話。ちゃんと聞いて」

声のトーンを落とすフルール。なのはは彼がこれから真剣な話をすると思い、彼の言葉を待った。

「これから君がやる事は、さっきみたいな怖い思いをする事だっかわかってる？」

なのははこの問いにコクンと首を縦に振った。

「でもでも、他の人達に迷惑がかかるのは嫌だし、私はユーノ君のお手伝いをしたい。それに」

なのはが言う事はある程度予想できた。

「私の力が足りなかった時は、手を貸してくれる人達がいるから。上条さんとユーノ君、それにフルール君」

しかし最後に付け足された言葉は予想外だった。

目を見開いて彼女を見た。

迷いの無い強い意志のある瞳。今まで彼女のこのような目を見たことが無かった。

彼女をこうさせたのは誰か、容易に想像できる。

悔しくて、嬉しい。複雑な気分。

だから、その思いを隠して、フルールはゆるく微笑んだ。

何故フルールが微笑んだのかわからずに頭に疑問符を浮かべるのはから離れて、地面を走るユーノをむんずつと掴んで抱えた。

「ちよ、いたたたたっ！」

「イタチ……じゃなくてフェレット。君に頼みたい事がある」

力任せに掴んだ為、悲鳴を上げるユーノを尻目にぶつきら棒に言った。何事かとなのはがおろおるとユーノとフルールを交互に見ている。

「私はなのはを魔法の世界わたしたちのせかいに連れて来たくなかったんだ」

「……」

「平凡に生きて欲しくて、それだけを願ってた。けど君に出会ってしまった。……君に良い印象を持っていないよ、正直」

「え？」

ユーノは微弱だが、彼の怒りを肌で感じ取った。そして、納得もいく。

彼も自分達と同じ、異能の力を扱う人種。力の危険性は彼もわかっている。

だからこそ、何の関係の無かったなのは魔法側こじちに来させたくなかったのだらう。

だからこそ、彼が次に言う言葉がわかった。

「……わかっています。今の僕は力が減って、出来ることは少ないです。だけど！ 僕がなのはに魔法を教えましたから、微力ながら彼女を助けます！」

ユーノの決意表明を聞いたフルールはニヤリと笑った。その顔を見たユーノは、

(……僕の言った事は間違いじゃない、よね?)

心の中で泣き言を言う。

早速心が折れそうになった。主に、フルールに弱みを捕まれた事に。

なのはとユーノの言葉を聞いたフルールは思う。自分の知らない所で人が成長して、繋がりを持っていく事に。

それに自分はどうすれば善いのか？

(私は、)

生き永らえた老兵のする事は決まっている。

新しき世代の者達を後押しする事。

(私は、見させてもらおう。次の世代が成すものきみたちを)

高町なのはは最後までユーノの手伝いをする意志を固めた。

ユーノ「スクライアは最後までなのはのサポートをする覚悟を決めた。

フルール「テイルケトは彼ら成しえる事を最後まで見守る事に決めた。

なのはは今日の夕餉にフルールを誘い、一同彼女の親が営む『翠屋』へ足を向けた。……のだが……。

「いらっしゃいま、ヒィっ!? なんで挨拶しただけで殺気!?!」

ピシッとした服装に身を包んだ、昨夜色々とお世話になつた高校生、上条当麻がなのはの兄、高町恭也の殺気を孕んだ視線に悲鳴を上げるといふ、当事者しか理解できないシユールな光景。

彼女達の一日はまだ終わる事は無さそうだ。

第二章 1 (後書き)

恐らく、身分証明書がいらなないバイトなんて存在しません
あるとしたらめっちゃくちゃ怪しいバイトでしょう

ユーノの扱いが酷いですが、後にフルールはユーノをぞんざいに扱
った事を後悔するでしょう

第二章 2 (前書き)

急ピッチで仕上げたので内容が軽いと思います
そこを見逃していただければ！

第二章 2

時間を遡り、なのはとフルールがジュエルシードと戦っていた最中の事。

喫茶店に入った上条当麻は、異世界ここに来てから何度目になるかわからない命に危機を迎えていた。

「いらつしゃいませ　　あら、貴方は……」

上条を出迎えたのは、先日なのはの家に行った時に居た栗色の髪の女性だった。

……たたり、と冷や汗が背筋をなぞるのを感じた。

「すみません、間違えました」

「上条君？　今日はどうしたんだい？」

手遅れだった。

栗色の髪の女性の様子に気付いたエプロン姿の店長さん（やはりとうかなのはの家に行った時に出会った黒髪のたくましそうな男性）が上条に声をかけた。

「ど、どうもっす」

「まあそんな所で立ち話もんだから、こっちにどうぞ」

一つの店を受け持つ店長さんらしく、やんわりと店内へ案内する高町士郎さん。上条は断れず誘導されるがままに高町に着いて行った。

一方、栗色の女性は高町の後ろをぎこちなく着いて行く上条に生

まれたばかりの小鴨を連想してクスリと微笑んだ。

「良いだろう。これから頼むよ上条君」

客席に座った高町士郎は、上条が『翠屋』に來た理由を聞くと、うんうんと納得したように頷いた後、二つ返事で採用しやがったのであった。

「ぼーぜんとする上条をよそに高町はいそいそとカウンターに戻っていく。」

再会した時には『翠屋』の制服を持ってきていた。

「もしもし高町さん？ 面接というのはもっところ、聞く事とかあるんじゃないでしょうか？ 経歴とか職業とか色々」

初めてのアルバイトという事もあり、どんな質問をされても答えられるようにはやて邸からここまで来る間にシュミレーションを重ねていた上条にとっても拍子抜けの一言だ。

そんなバイト初心者の様子を見た高町は飄々と、

「何か聞かれたかったのかい？」

「遠慮しておきます」

「深く聞きはしないさ。見てれば何となくわかる。そういう人間は何人も見てきたからね」

高町は深くは語らなかつたが、それでも助かる。心内で感謝した。

しばらくして更衣室から出た上条。貸してもらった黒のエプロンと白のYシャツは意外にもこの男に似合っていた。上条が更衣室から出てきたのを見かけた栗色の女性は、上条に仕事の旨を伝えてすぐにホールに戻っていく。

海鳴の街角で、一人のアルバイトが誕生した瞬間だった。

「……という事がありました」

「そうだったんですか。すごい偶然ですね」

「……」

上条がここに来た経緯を伝えるとなのは嬉しそうに上条を見つめ、フルールは口をへの字に曲げる。上条がここにいるのがよほど不満らしい。因みに一応飲食店のため、ユーノは同じく先日高町家で見かけた眼鏡をかけた女の人に連れて行かれた。

「つてか高町んちつて喫茶店やってたんだな。……どつりで礼儀正しい」

「ふえ？」

ぼそりと言った一言がわずかに耳に入ったのだろう、なのは首をかしげてキョトンと声を漏らした。

そんななのはの様子を見た上条は学園都市インデックスにいる暴食シスターが頭に浮かび、

沸々とイタズラ心が湧き出してきた。

「他愛も無い独り言でございますことよ」

「そうなんですか？」

「そのとおりです。昨日の高町のバリアジャケットだっけ？ 可愛かったなあアレと呟いただけでせう」

上条が茶化してなのはに伝えると、ポフツと何かが破裂する擬音とピキツと何かにヒビが入る擬音とカリカリと明らかに擬音じゃない音が聞えた。

一つは恥ずかしさに顔を赤くするのはから。一つはカウンター奥の厨房辺りから。最後の一つはなのはのすぐ横から。

ジトオーとした目付きで上条を睨み尚且つテーブルを引っ掻いてひらがなでもカタカナでも漢字でもアルファベットでもない、いずこの燃え盛るニコチンバーコードの持っているカードに書かれた文字っぽい文字を書いていた。

「そんな、掘り返さないでください！ 恥ずかしい……」

なのはが顔を俯かせ蚊の羽音のような声を聞くどころじゃない。なのはは気づいていない。彼女のすぐ隣の自称男の娘が、恐らく火葬の下準備を始めてる事に。

「あ、あの、お願いがあるんですけど」

一応幻想殺しがあるけど油断したら教われるだろうなあと考えていた時不意になのはから声がかかった。

「お願い？」

「大した事じゃないんですけどね」

「いいでしょ。迷い犬探しから怪物退治までドーンと来なさい」

何故怪物退治と迷い犬探しと同列かが疑問だ。が、それが目の前の人物のあり方なんだろうとなのははあえて聞かなかった。

「高町って他人行儀だし、ウチ、兄弟も多いからややこしいでしょ？ だからなのはって呼んで欲しいんです」

「……初対面の相手にいきなり名前を言うのは気が引ける」

と言いかけてふと思いついた。見ず知らずの人の気軽に名前を呼ぶのは、高校生だと馴れ馴れしく感じて相手に不快感を与ええる。だがなのはは小学生だ。上条ら大人の事情なんて些細な事。それに知り合って間もない者と親しみを持つには、相手の名を呼ぶ事が一番効果的だ。

「ああ、良いぜなのは」

「あ、ありがとうございます！」

なのはは太陽のような笑顔を浮かべた。

彼女の笑顔を見た時、ぼんやりとここにはいない少女と重なった。

「……いつまで見詰め合うつもりだ？」

不機嫌そうな表情を作ったフルールがボソリと、二人にはっきり伝わる程度の声で呟いた。

指摘された二人は気まずそうに顔を逸らした。上条は気まずくなる事言うんじゃないかねえー、と視線を送ったが逆に極寒の冷たい目で睨み返された。

「休憩が長過ぎるんじゃないかい上条君？」

ポンと手を肩に置かれて、上条はビクリと肩を震わせた。触れら

れるまで高町の気配をまるで感じなかったから。

「すみません！ 今戻ります！ じゃ、またなのは！」

シユビツ！ と手を上げてそそくさと仕事へ戻る上条は、ふとくるりと身体を反転させる。

「……魔術師殿？ なにゆえピンクのランドセルを……。やっぱりオカ
カ
カ」

「さつさと帰れ馬鹿あ！」

未だにフルールの誤解……もとい上条の思い込みは全く解けていないのであった。

『翠屋』のバイトも順調に行き、なのはの友人達に驚かれたり上条の仕事振りを見に来たはやてをつまみ出そうとして高町士郎と恭也に頭を叩かれたりなのはとユーノのジュエルシード探索をはやてが手伝おうとするのを全力で阻止したりと充実した日々を送っていた。

フルールの方ももう少しで必要な準備が終わると言った。そしてさつさと自分の教会へ帰ってしまうので詳しくはわからない。

ようするに、この世界とのつながりが『もう少し』で途切れてしまつと言つ事。

「またきやがりましたかオカン少女め」

「オカンちゃんもん！ そない言つたら当麻さんは化石や！」

ゲシイと車椅子で上条を轢き倒そうとするはやてに上条ははやての頭をワシツカミして前に進ませないように抵抗する。

一進一退。

どちらも退く気は無い。退いたら痛い目に遭うのは自分だから。そんな彼らのじゃれあいは見えていて楽しいものだ。なのは、アリサ、すずかの三人娘と高町家は微笑ましい光景に頬を緩ませた。

今日は日曜日で、高町士郎がコーチ兼オーナーを務める翠屋JFの練習試合。

なのは達はその応援に行ってきた所。

試合は見事勝利を収めたそうだ。

そのご褒美にと士郎は『翠屋』にチームを招待したのだ。

この日、バイトを始めて間もない上条は初めて殺人的な忙しさを体験した。

「ありがとうございましたー」

「ありがとうございましたー……」

長年の経験の差なのだろうか。ぐったりと息を吐く上条に対して、同じ時間を共に働いていた高町恭也はまだまだこれから！ といった感じだ。

……趣味は古臭いくせにアクティブな人間だ。

「うな垂れてる場合じゃないぞ上条君。今日は始まったばかりだ」

「……おひさまは真上にあるのでせうが？」

「爺臭いこと言っな」

澁々とカウンターに消えていく恭也に着いて行った時。

ふと日の光が何かに反射して、青白い光が上条の目を刺激した。

「？」

その光は、何処かで見たとような気がした。

「上条君？」

「あ、すみません」

気のせいだろう。それに今日はなのはとユーノのジュエルシード探索はお休みだそうで、この後はゆつくりさせられた方が良さそう。はやてもずずかと一緒に街へ行くと言いつけかけた。あまり神経質になつたらなのは達が休めないだろうし。

上条は、光の事をすぐに忘れてしまった。

一通りの仕事を終えて、高町恭也と共に皿洗いに没頭している時、

「そついえば誰か足りないような……」

そう。なのはに引つ付いている魔術師ちひつ子がいない。

上条の疑問は上条より多い皿の山を作つた恭也が答える。

「たまにいなくなるからなあいつは」

「あんな子供がですか？」

「見た目より年を食つてるってさ。まあ、なのは達の影響をモロに受けてるが」

時折子供っぽく反論するあの姿は、いい大人がやっていると思うとちよつと滑稽に思えた。

不貞腐れて頬を膨らませたり、インデックスのように食べ物に釣られたり、からかったらまた不貞腐れたり。今まで出会った人の中でも濃ゆいキャラをしている彼だが、また色々複雑な事情を抱えているようだ。

だから恭也に聞いた。

「恭也さん、あいつの事なんか知ってますか？」

「あいつ？ ……ああ、フルールの事か」

うむ、と唸り、

「あいつはあまり自分の事は話したがないんだ。それ以外のことは嬉しそうに話すけどな。それに」

「それに？」

「……いや、俺からはこれ以上……な」

恭也はそう言うと、黙って上条の分の皿を拭き始めた。

これ以上聞ける事はないな、と思った上条は恭也と一緒にまた皿拭きに没頭した。

皿拭きに没頭しながらも、上条の頭の中には魔術師の絵が浮かんでる。

自分が異世界から来たと知っていた。

魔法の技術を少なからず知っていた。

上条の世界に帰る術すべを知っていた。

でも相手は魔術師。上条が今まで出会った魔術師達はろくな者がいなかった。

それにフルール自身、彼の周りの人間も知らない事が多い。

フルールの言う事をそのまま鵜呑みにしていいのか？

上条にフルールへの猜疑心が生まれた時だった。

何処からとも無く響いてきた地響きに皿を拭く手が止まる。地震か？ 恭也と顔を見合わせる。すると地響きがさらに大きくなり、しばらくすると地響きは静まった。

店内に残った人達が今の地響きに首を捻っていた時。

ふと上条は目線を窓の外に向けて、それを見た。

それは普通の樹木。かなり年季が入ったようにぶつとい幹が存在感を醸し出している。

だが、

建物同士のすきまからあんな巨木は見えただろうか？

「っ？ 何だったんだろうな今、の……」

窓の外を見て固まった上条に声をかけた恭也もその光景を見て絶句する。

上条は自分の遠近感覚がおかしくなったかと真面目に考えたが杞憂だった事に何ともいえない安心感に浸っていたが、すぐに頭を切り替える。

これは宝石の仕業ジュエルシードに違いない、と。

なのはに連絡を、と思ったが連絡先を知らなかったため断念。同じくフルールも。

店の外で一般人が巨木に気が付いて驚愕と戸惑いの悲鳴を上げている中で上条を思考の海から引き上げたのは恭也の一言だった。

「あの方向は街じゃなかったか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2397p/>

とある魔法の漂流者《キャストウェイ》

2012年1月2日06時46分発行